言語研究（*Gengo Kenkyu*）**157**: 1–36（2020）　doi: 10.11435/gengo.157.0_1

韓国語における疑問文の形成と体言化
――慶南方言・済州方言の名詞述語疑問文と動詞述語疑問文を手掛かりに――

鄭　聖汝
大阪大学

【要旨】韓国語の名詞述語疑問文は，元来コピュラなしの［名詞句＋ *ka/ko*］の構造を基本にしている。本論では，動詞述語疑問文の場合も，中世語から現代語に至るまで，疑問形式 *-ka/ko* の前にくる要素は名詞句相当であると主張する。重要なのは，動詞基盤の体言化辞 *-m*, *-n*, *-l* と丁寧体疑問に用いられる体言基盤の体言化辞 *-s* の機能である。議論を進める上で，Shibatani（2009, 2017, 2018, 2019）の新しい体言化理論がきわめて有益であり，中世語はもちろん，現代標準語，慶南方言，済州方言に見られる多様な疑問形の分布を包括的かつ統一的に説明できる *。

キーワード：韓国語疑問文，体言化，慶南・済州方言，疑問形式*-ka/ko*，体言化辞*-m*, *-n*, *-l*, *-s*

1. はじめに

現代韓国語の標準語（ソウル市及び首都圏），慶南方言（慶尚南道），済州方言（済州道・済州島）における疑問文には，文末にどのような形式を用いるか，また，Yes-No 疑問文（Y/N-Q）と疑問詞疑問文（WH-Q）とで形式上の使い分けがあるかどうかという点で相違が見られる。

次に示すのは，名詞を述語とする非丁寧体の名詞述語疑問文である。*n* で始まる疑問形式を N 型，*k* で始まる疑問形式を K 型と呼ぶと [1]，標準語では N 型，慶南方言では K 型，済州方言では N 型と K 型の両方が用いられる。また，標準語では Y/N-Q と WH-Q で同じ形式が用いられるが，慶南方言と済州方言は Y/N-Q と

* 本研究のきっかけとなった国立国語研究所「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究プロジェクト」（リーダー：金水敏教授）に感謝申し上げる。本論の作成においては，ライス大学の柴谷方良教授に多くの理論的助言をいただいた。2017 年 9 月に 1 か月間，訪問研究者としてソウル大学に滞在した折には，李賢熙教授，黄善曄教授，朴鎮浩教授，鄭承喆教授及び国語学大学院生の方々と有益な議論ができ，情報提供もいただいた。ここに記して感謝申し上げる。査読者からも様々な助言やご指摘をいただいた。本論は，科学研究費助成金・基盤研究 C（課題番号 7K02681）及び大阪大学国際共同研究促進プログラム（2015 ～ 2018 年度）の支援による研究成果である。

[1] 後述するように，韓国語の疑問形式は K 型を基本とし，N 型は *k* の弱化により生じたものである。韓国語学でも，*-ka/ko* は「疑問添辞」（question particle）と呼ぶが（李賢熙 1982，高恩淑 2011 など），*-nya/ni* は「疑問形語尾」と呼び，疑問添辞とは呼ばない。

WH-Q で異なる形式が用いられる[2,3]。

〈標準語〉（*-nya* と *-ni* は置き換え可）

（1）　a.　*ike*　*ney*　*chayk-i-**nya/ni?***　(Y/N-Q)
これ　あなた .GEN　本 -COP-INT
「これはあなたの本なの？」

b.　*ike*　*nwukwu*　*chayk-i-**nya/ni?***　(WH-Q)
これ　誰　本 -COP-INT
「これは誰の本なの？」

〈慶南方言〉

（2）　a.　*iki*　*ni*　*chayk-i-**ka?***　(Y/N-Q)
これ .NOM　あなた .GEN　本 -COP-INT
「これはあなたの本なの？」

b.　*iki*　*nwu*　*chayk-i-**ko?***　(WH-Q)
これ .NOM　誰　本 -COP-INT
「これは誰の本なの？」

〈済州方言〉

（3）　a.　*ike*　*nuney*　*mAl-i-**ka?***　(Y/N-Q)
これ　あなた .PL.GEN　馬 -COP-INT
「これはあなたたちの馬なの？」

b.　*ike*　*nwukey*　*mAl-i-**ko?***　(WH-Q)
これ　誰 .GEN　馬 -COP-INT
「これは誰の馬なの？」

（4）　a.　*ike*　*nuney*　*mAl-i-**nya?***　(Y/N-Q)
これ　あなた .PL.GEN　馬 -COP-INT
「これはあなたたちの馬なの？」

b.　*ike*　*nwukey*　*mAl-i-**ni?***　(WH-Q)
これ　誰 .GEN　馬 -COP-INT
「これは誰の馬なの？」　（洪宗林 1975: 159）

---

[2] 韓国語の文字表記は Yale Romanization System を用いる。中世語において現在消滅した文字・音声は次のように大文字で表記する。A [ɔ]: 半開後舌円唇母音，Aleya；S [z]: 有声歯茎摩擦音（半歯音），Half-Sios；H [ʔ]: 声門破裂音，Old Hiuh；B [β]: 有声両唇摩擦音；I [ŋ+i]: 有声軟口蓋鼻音（牙音，Old Iung）＋母音 [i]。中世語資料の漢字表記は現代語の音価で表記する。例）願望：*wuenmang*（원망），廣熾：*kwangchi*（광치）

[3] 本論で用いる略語は以下の通り。ACC: accusative, COM: commitative, CONJ: conjunctive form, COP: copular, DAT: dative, FUT: future, GEN: genitive, HON: honorific, IMP: imperative, IND: indicative, INT: interrogative, LOC: locative, NMLZ: nominalization, NMLZR: nominalizer, NOM: nominative, NP: noun phrase, NPM: NP-use marker, PL: plural, POL: polite, PRF: perfect, PRS: present, PST: past, Q: question, SP: sentence-ending particle, TOP: topic, 2: second person

一方，動詞・形容詞（以下「動詞」で両者を代表させる）を述語とする非丁寧体の動詞述語疑問文は，標準語，慶南方言，済州方言のすべてにおいてN型が現れる（後述するように，慶南方言，済州方言でも丁寧体の疑問文ではK型が用いられる）。名詞述語疑問文と同様，標準語ではY/N-QとWH-Qで同じ形式が用いられ，慶南方言と済州方言では異なる形式が用いられる。

〈標準語〉（*-nya* と *-ni* は置き換え可）

(5)　a.　*ne*　*cikum*　*pap*　*mek-**nya/ni**?*　(Y/N-Q)
あなた 今　ご飯　食べる -INT
「あなたは今ご飯を食べているの？」

b.　*ne*　*cikum*　*mwue*　*mek-**nya/ni**?*　(WH-Q)
あなた　今　何　食べる -INT
「あなたは今何を食べているの？」

〈慶南方言〉

(6)　a.　*ni*　*sipang*　*pap*　*mwuk-**na**?*　(Y/N-Q)
あなた　今　ご飯　食べる -INT
「あなたは今ご飯を食べているの？」

b.　*ni*　*sipang*　*me*　*mwuk-**no**?*　(WH-Q)
あなた　今　何　食べる -INT
「あなたは今何を食べているの？」

〈済州方言〉[4]

(7)　a.　*nu*　*cikum*　*pap*　*mek-e-m-si-**nya**?*　(Y/N-Q)
あなた 今　ご飯　食べる -CONJ-NMLZR- いる -INT
「あなたは今ご飯を食べているの？」

b.　*nu*　*cikum*　*mwusike*　*mek-e-m-si-**ni**?*　(WH-Q)
あなた 今　何　食べる -CONJ-NMLZR- いる -INT
「あなたは今何を食べているの？」

標準語でも，丁寧体疑問文では名詞述語疑問文・動詞述語疑問文の両方においてK型が現れるが，その場合，濃音を伴う。

〈標準語〉

(8)　a.　*ce*　*pwun-un*　*yenge*　*sensayngnim-i-pni-**kka**?*　(Y/N-Q)
あの 方 -TOP　英語　先生 .HON-COP-POL-INT
「あの方は英語の先生ですか？」

[4] 済州方言の（7a）は，*-nya* の *-n* が脱落し，*mek-em-si-nya* > *mek-em-si-ya* > *mek-em-sya* ともなる。

b.　*cikum*　*mwusun*　*kongpwu-lul*　*ha-pni-**kka?***　(WH-Q)
今　何の　勉強 -ACC　する -POL-INT
「今何の勉強をしていますか？」

現代韓国語の疑問文には，なぜこのような多様な疑問文の形が存在するのだろうか。本論ではこの問いについて，「体言化」の観点から考察を行う。2 節では，体言化に関する理論的基盤として，Shibatani（2009, 2017, 2018, 2019）の体言化理論を紹介する。3 節では非丁寧体の名詞述語疑問文，4 節では非丁寧体の動詞述語疑問文，そして 5 節では丁寧体疑問文について検討する。6 節ではその他の疑問文として 2 人称疑問と間接疑問を取り上げ，7 節で結論を述べる。

2. 新しい体言化理論

本節では，韓国語学の伝統的な捉え方と比較しながら，Shibatani（2009, 2017, 2018, 2019）による新しい体言化理論の概略を紹介する。

Shibatani の理論によると，体言化には「動詞基盤（用言基盤）体言化」と「体言基盤体言化」がある。*sing* (V) → *singer* (N),「（財布を）する」(V) →「すり」(N),「活動」(VN) →「活動家」(N) は動詞基盤体言化の例，*village* (N) → *villager* (N),「芸術」(N) →「芸術家」(N) は体言基盤体言化の例である。韓国語学の体言化に関する伝統的な議論は，いわゆる動名詞語尾 *-n*, *-l* に集中しており，体言化現象を動詞基盤体言化に限る傾向が顕著であるが，体言化の全体像を捉えるためには，体言基盤体言化も重視する必要がある（Shibatani and Chung 2018，鄭，近刊 a, b 参照）。

体言化にはまた，「語彙的体言化（lexical nominalization）」と「文法的体言化（grammatical nominalization）」がある。「すり」は語彙的体言化の例，「人の財布をする（のは犯罪だ）」の「人の財布をする」は文法的体言化の例である。文法的体言化により作られる形式を，山田文法（山田 1908）に従い，「準体言」と呼ぶ。

準体言には，動詞基盤体言化のための体言化辞（以下，動詞基盤の体言化辞）から作られるものと，体言基盤体言化のための体言化辞（以下，体言基盤の体言化辞）から作られるものがある。また，準体言には，名詞と同じく，指示機能を有する「名詞句用法」と主名詞を修飾する「修飾用法」がある。

いわゆる属格標示の「の」は，準体言を作る体言基盤の体言化辞とされる。「[[僕の]NMLZ]NP を取って」の「僕の」は名詞句用法，「[[僕の]NMLZ 本]NP」の「僕の」は修飾用法である（Shibatani 2017, 2018, 2019）。韓国語の属格標示（韓国語学で言う冠形格助詞）についても同じである（Shibatani and Chung 2018，鄭，近刊 a, b）。

Shibatani によれば，体言化はメトニミーを基盤とした文法作用である。名詞句用法の「僕の（は，あれだ）」の場合，「僕が密接に関連するモノ」—例えば，僕が書いた本，僕の所有するカバン，僕の住む家など—が概念表示（denote）され，その具体的な指示対象は文脈によって決まる。修飾用法の「僕の（本）」も，「僕が密接に関連するモノ」という概念表示により，主名詞（「本」）の概念表示が限定される。

動詞のいわゆる連体形も準体言として分析される。「[太郎が買った]NMLZ のはこの本だ」の「太郎が買った」は名詞句用法，「[太郎が買った]NMLZ 本」の「太郎が買った」は修飾用法である。名詞句用法の「太郎が買った」の後のいわゆる準体助詞「の」は，準体言が名詞句用法である（修飾用法でない）ことを明示する「名詞句用法標識（NP-use marker: NPM）」と分析される（Shibatani 2017, 2018, 2019）。

韓国語のいわゆる動名詞語尾 *-n*, *-l*（韓国語学で言う冠形詞形語尾）も，準体言を作る動詞基盤の体言化辞として分析される。「[*sensayngnim-i ssu-n*]NMLZ *chayk*」（先生が書いた本）の「*sensayngnim-i ssu-n*」（先生が書いた）は修飾用法，「[*sensaygnim-i ssu-n*]NMLZ ***kes***-*ul ilk-ko iss-ta*」（先生が書いたのを読んでいる）の「*sensaygnim-i ssu-n*」は名詞句用法である。日本語の準体助詞「の」に準ずる韓国語の *kes* も，（形式）名詞ではなく，名詞句用法標識として分析される [5]。南豊鉉（1996a, b）が高麗時代の釋讀口訣資料から明らかにしたように，古代語・中世語 [6] では，*-n*, *-l* を伴う形式がそれ自体で名詞句の主名詞として機能したが（例は 4 節であげる），現代語では *kes* を必要とする。この点については，*-n*, *-l* を伴う形式が現代語では名詞句用法を失ったのではなく，現代語でも *-n*, *-l* には名詞句用法があるが，その場合は名詞句用法標識 *kes* が要求されると考える [7]。

-n, *-l* に関連して，河野（1979: 513, 528）は，叙述形語尾 *-nila*, *-lila* を *-n*, *-l*（原著論文では *-r*）に（形式）名詞 *-i* と終止形語尾 *-la*（原著論文では *-ra*）が付いたものと分析している [8,9,10]。韓国語学では，*-n*, *-l* に続く *-i* が形式名詞かコピュラかが問

---

[5] *kes* については，李崇寧（1975: 105）も「不完全や形式云々の名詞ではなく，一種の形態素のような機能を帯びている」と指摘している。実際，*kes* には，日本語の「物」のように名詞としての機能がなく，歴史的にも名詞として機能していたという証拠はない。このことは，後述する *-i* にもそのまま当てはまる。

[6] 韓国語の時代区分は学者間で見解の相違があるが，本論では学界の一般的な慣行に従い，ハングルが作られた直後の 15–16 世紀の韓国語を「中世語」，17–19 世紀の韓国語を「近代語」，20 世紀以降の韓国語を「現代語」と呼ぶ。ハングル以前の新羅から高麗までの 7–14 世紀は，鄕札（新羅鄕歌），吏讀，釈讀口訣などによる文献時代であり，これらはまとめて「古代語」とする。

[7] 李丞宰（1995）は，動名詞語尾 *-n*, *-l* が冠形詞形語尾に変化したために，後に形式名詞（*-tA*, *-sA* など）が現れるようになったとし，「動名詞の名詞化機能がなくなるに連れて名詞性を失い，この名詞性を補うために形式名詞の挿入が起こった」（p.250）と述べているが，本論では *-n*, *-l* は体言化辞であり，その後に続く要素も形式名詞ではなく，名詞句用法標識と考える。

[8] 河野氏自身は，連体形 *-n*, *-l* に「もの，こと」の意味を表す *-i* が付いたものと説明し，さらに *-i* を伴って動名詞形 *-ni*, *-li* を作ると述べている。しかし，「もの」は「モノをください」のように単独でも使えるが，*-i* は単独では使えない。このことから，韓国語学では *kes* と共に *-i* も形式名詞（または依存名詞）であると考えるのが一般的である。

[9] Ramstedt（1939: 105–106）は，叙述形語尾 *-nila*, *-lila* の *-n*, *-l* は動名詞語尾，*-ila*（原著論文では *-ira*）は particle（韓国語学では添辞）としている。高永根（2011: 37）も，叙述形語尾は歴史的には動名詞形 *-n* に添辞がついて形成されたものとする。金武峰（1988）も，叙述形語尾 *-nila*, *-lila* と疑問形語尾 *-nya/nyo*, *-lya/lyo* について「後期中世国語から叙述形，疑問形語尾へとその機能が変わった」（p.12）と述べている。

[10] Lee and Ramsey（2011），金武峰（1988）は，系統論の観点から，動名詞語尾 *-n*, *-l*（及び *-m*）はモンゴル語やチュルク語などのアルタイ諸語と起源を同じくするとし，起源的にアル

題にされているが（高恩淑 2011: 78），本論ではこの *-i* は形式名詞でもコピュラでもなく，前述の *kes* と同じく名詞句用法標識と考える[11]。後述するように，名詞句用法標識 *-i* は韓国語の疑問文の形成においてきわめて重要な役割を果たす。

このように，Shibatani の体言化理論では，*-n*, *-l* が準体言を作る動詞基盤の体言化辞として，また *-i* や *kes* が名詞句用法標識として分析される。次節以降では，これにより，韓国語の疑問文の形成について包括的・統一的な説明が可能になることを見ていく。

3. 非丁寧体疑問文の形成（1）：名詞述語疑問文

本節と次節では，非丁寧体疑問文の形成について考察する。

まず，名詞述語疑問文について見る。これまでの研究資料及び中世語コーパス資料[12]を見る限りでは，中世韓国語の名詞述語疑問文は，名詞に疑問形式 *-ka/ko* が直接付く「コピュラなし疑問文」であり，Y/N-Q（*-ka*）と WH-Q（*-ko*）の区別があった。中世語では，（9a）の *pel-a* (← *pel-ka*)，（9c）の *coy-o* (← *coy-ko*) のように，*-l* や半母音 *-y* に *-ka/ko* が続く場合は *k* が弱化・脱落する（李丞宰 1996 など）[13]。

〈中世語〉NP-*ka/ko* → NP-*a/o*（*-l*, *-y* に続く場合）

（9）　a.　*i-nAn*　*sang-**ka***　*pel-**a*** (← *pel-**ka***)　(Y/N-Q)
これ -TOP　賞 -INT　罰 -INT
「これは賞か罰か。」　（蒙山和尚法語略録 53, *1467*）

b.　*i*　*esten*　*kwangmyeng-**ko**?*　(WH-Q)
これ　どのような　光明 -INT
「これはどんな光明か。」　（月印釋譜 10: 7, *1459*）

c.　*kuti*　*casik*　*epteni*　*musus*　*coy-**o*** (← *coy-**ko***)　(WH-Q)
貴方 子息　なかったが　何の　罪 -INT
「貴方は子供がいなかったのに，何の罪か。」　（月印釋譜 1: 7, *1459*）

（許雄 1975: 367–370）（注釈は本論筆者，以下同様）

コピュラなし疑問文は，現代語でも慶南方言・済州方言に見られる[14]。中世語と

タイ諸語のすべての文は述部に名詞句を置く名詞文（nominal sentence）であったことをふまえ，韓国語も同様であると述べている（安秉禧・李光鎬 1990: 329 も参照）。

[11] 名詞句用法標識 *-i* は，中世語の *ap-i*（父），*em-i*（母）などの親族名詞や，*kulyek* > *kulyek-i* > *kileki*（雁），*olchang* > *olchang-i* > *olchayngi*（オタマジャクシ）などの動物名に用いられた体言基盤の語彙的体言化辞 *-i* が，文法的体言化のための名詞句用法標識として援用されたものと考える（中世語の *-i* 添加名詞については黄善曄 1997 参照）。

[12] 中世語コーパス資料には，「韓国国立国語韓国語史コーパス」を大元としてソウル大学の朴鎮浩教授によって補充・再構築された UniConc を使用した。

[13] ただし，実際の *k* の弱化はより複雑で，*ani-ko* > *ani-o*（否定 -CONJ；なくて），*ne-kwa* > *ne-wa*（あなた - と）のように，*-y* 以外の母音の後でも生じた。

[14] 疑問文にはコピュラなし疑問文があるが，平叙文の場合は中世語でもコピュラが入る。

異なり，*k* の弱化は起きない。また，これらの方言では，コピュラ *-i* に *-ka/ko* を直接付けた「K 型コピュラ疑問文」も成立する（*k* は弱化せず，*-i-ka/ko* となる）。コピュラなし疑問文は高年齢層（主に 70 代以上）の話者に使用され，若年齢層は使わないが，K 型コピュラ疑問文は全年齢層で使用されることから，K 型コピュラ疑問文はコピュラなし疑問文より後で成立した形式と考えられる[15]。

〈慶南方言〉　① NP-*ka/ko*（コピュラなし疑問文：K 型）
　　② NP-COP-*ka/ko*（K 型コピュラ疑問文）

（10）a.　*ni-ka*　*haksayng-**ka**?*　(Y/N-Q)
あなた -NOM　学生 -INT
「あなたは学生か？」

b.　*iki*　*nwu*　*os-**ko**?*　(WH-Q)
これ .NOM　誰　服 -INT
「これは誰の服か？」　（徐正穆 1987: 21）

（11）a.　*ni-ka*　*haksayng-**i-ka**?*　(Y/N-Q)
あなた -NOM　学生 -COP-INT
「あなたは学生なの？」

b.　*iki*　*nwu*　*os-**i-ko**?*　(WH-Q)
これ .NOM　誰　服 -COP-INT
「これは誰の服なの？」　（徐正穆 1987: 21）

〈済州方言（K 型）〉　① NP-*ka/ko*（コピュラなし疑問文：K 型）
　　② NP-COP-*ka/ko*（K 型コピュラ疑問文）

（12）a.　*ike*　*nuney*　*mAl-**ka**?*　(Y/N-Q)
これ　あなた .PL.GEN　馬 -INT
「これはあなたたちの馬か？」

b.　*ike*　*nwukey*　*mAl-**ko**?*　(WH-Q)
これ　誰 .GEN　馬 -INT
「これは誰の馬か？」　（洪宗林 1975: 158–159）

（13）a.　*ike*　*nuney*　*mAl-**i-ka**?*　(Y/N-Q)
これ　あなた .PL.GEN　馬 -COP-INT
「これはあなたたちの馬なの？」

b.　*ike*　*nwukeyney*　*mAl-**i-ko**?*　(WH-Q)
これ　誰 .PL.GEN　馬 -COP-INT
「これは誰の馬なの？」　（洪宗林 1975: 159）

---

[15] 徐正穆（1987: 21）は，慶南方言のコピュラなし疑問文は K 型コピュラ疑問文からコピュラを削除したものと見なしているが，歴史的にはこの見方は正しくない。Martin（1992: 593）も，「体言 + *-ka/ko*」は「体言 + *-in* + *-ka/ko*」の copula modifier '*-in*' が省略されたものと見ているが，これは直接疑問文と間接疑問文を混同した見方である。間接疑問文については 6 節で述べる。

標準語にはコピュラなし疑問文はなく，名詞には必ずコピュラが続く[16]。また，標準語では，コピュラに疑問形式が直接付くことはなく，コピュラに動詞基盤の体言化辞（いわゆる動名詞語尾）*-n* と名詞句用法標識 *-i*（2 節参照）を付けた上で疑問形式 *-ka* を付ける。そして，*k* の弱化（*-n-i+ka* > *-nya*）により，N 型の *-nya* が形成される。疑問形式を省略した「コピュラ + *n-i*」の形でも疑問文が成立し，やはり N 型の *-ni* になる[17]。このような疑問文の形成は，4.3 節で述べる体言化辞 *-n* を用いた動詞述語疑問文の場合も同じである。

済州方言の名詞述語疑問文には，先に見た K 型のほかに N 型もあり，*-nya* は Y/N-Q で，*-ni* は WH-Q で用いられる[18]。（記号 # は，*k* の弱化によって実際は現れないことを表すものとする。）

〈標準語〉　① [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ *-i* NPM]NP-*#ka*
→ [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ *-i* NPM]NP-*a*（N 型）
② [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ *-i* NPM]NP-~~*a*~~（N 型）

（14）a.　*ike*　*ney*　*chayk-i-**nya/ni**?*　(Y/N-Q)（=(1a)）
これ　あなた .GEN　本 -COP-NMLZR.NPM.INT
「これはあなたの本なの？」

b.　*ike*　*nwukwu*　*chayk-i-**nya/ni**?*　(WH-Q)　（=(1b)）
これ　誰　本 -COP-NMLZR.NPM.INT
「これは誰の本なの？」

〈済州方言（N 型）〉　① [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ *-i* NPM]NP-*#ka*
→ [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ *-i* NPM]NP-*a*（N 型）
② [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ *-i* NPM]NP-~~*a*~~（N 型）

（15）a.　*ike*　*nuney*　*mAl-i-**nya**?*　(Y/N-Q)（=(4a)）
これ　あなた .GEN.PL　馬 -COP-NMLZR.NPM.INT
「これはあなたたちの馬なの？」

---

[16] 母音で終わる要素にコピュラが付く場合は，音韻的な理由により，コピュラが表面に現れない。

[17] これは，日本語で「…のか？」の「か」が省略して「…の？」と言うのと似ている。ソウル出身の 20 代男性（ソウル大学大学院生・国語史専攻）によれば，男性同士では *-nya* を使い，*-ni* は用いないとのことである。

[18] 済州方言のコピュラ疑問文は，慶南方言と同じ K 型と標準語と同じ N 型が選択できる。ただし，筆者の 2017 年の調査によると，済州方言の 10 ～ 20 代の話者は，K 型コピュラ疑問文をもはや使わず，N 型を用いる傾向がある。

〈済州方言〉
cain　*hAkseyng-**i-{ka/n-y-a}**?*　「あの子は学生か？」
あの子 .TOP 学生 -COP-{INT/NMLZR-NPM-INT}

b.　*ike*　*nwukey*　*mAl-i-**ni**?*　(WH-Q) (=(4b))
　これ　誰 .GEN　馬 -COP-NMLZR.NPM.INT
「これは誰の馬なの？」　（洪宗林 1975: 159）

非丁寧体の名詞述語疑問文の形成をまとめると，次のようになる。K 型にはコピュラなし疑問文（中世語，慶南方言，済州方言の *-ka/ko*）とコピュラ疑問文（慶南方言，済州方言の *-i-ka/ko*）の二種類があるが，N 型にはコピュラ疑問文（標準語，済州方言）しかない。N 型の成立にはコピュラが関係する（しかしその逆は真ではない）。いずれにしても，最終的には疑問形式の前の要素が名詞句相当の構造を示すようになる。

〈中世語〉（K 型コピュラなし疑問文）
K 型　NP-*ka/ko* → NP-*a/o*（*-ka/ko* の直前が *-l*, *-y* の場合；*k* の弱化）

〈標準語〉（N 型のみ）

N 型　① [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM]NP-#*ka* → [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM]NP-*a*
　　② [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM]NP-~~*a*~~

〈慶南方言〉（K 型のみ）
K 型　① NP-*ka/ko*（コピュラなし疑問文）
　　② NP-COP-*ka/ko*（K 型コピュラ疑問文）

〈済州方言〉（K 型と N 型両方成立）
K 型　① NP-*ka/ko*（コピュラなし疑問文）
　　② NP-COP-*ka/ko*（K 型コピュラ疑問文）
N 型　① [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM]NP-#*ka* → [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM]NP-*a*
　　② [[[NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM]NP-~~*a*~~

4. 非丁寧体疑問文の形成（2）：動詞述語疑問文

動詞述語疑問文は，動詞基盤の体言化辞 *-n*, *-l* または *-m* で動詞句を準体言にし，それに疑問形式 *-ka/ko* を付けて作る。以下では，*-m*, *-n*, *-l* の順に見ていく。

4.1. 体言化辞 *-m* による動詞述語疑問文

現代韓国語の *-m* は動詞基盤の体言化辞であり，動詞語幹に *-m* を付けて準体言を作る。*-m* による準体言は，名詞と同じように事柄や事物を指し，事柄を指す場合は事態準体言（event nominalization），事物を指す場合は項準体言（argument nominalization）と呼ばれる（Shibatani 2017, 2018, 2019）。*cwuk-ta*（V）（死ぬ）→ *cwuk-um*（死）はコトを概念表示（denote）する事態準体言，*cwuk-em* > *cwu-kem*（遺

体）はモノを概念表示する項準体言である[19]。（16）の *kuli-m* も，「絵」を表す場合は項準体言，「描くこと」を表す場合は事態準体言である。

〈標準語〉

（16）*kuli-**m**-ul*　*kuli-**m**-ulosse*　*maum-uy*　*anceng-ul*
描く -NMLZR-ACC　描く -NMLZR- として　心 - の　安定 -ACC
chac-ta.
探す -IND
「絵を描くことで心の安定を取り戻す。」

中世韓国語には，*-m* による準体言（*-m* の前に *-o/wu* を入れる（安秉禧・李光鎬 1990: 126））に疑問形式 *-ka/ko* を付けた動詞述語疑問文が見られる。

〈中世語〉[[VP-*o/wu-m*]NMLZ]NP-*ka/ko*（K 型：コピュラなし疑問文）

（17）a.　*i*　*isy-wu**m-ka***　*i*　*eps-o**m-ka***
これ　有る -NMLZR-INT　これ　ない -NMLZR-INT
「これは有か，これは無か」　（金剛經三家解 3: 39a, *1482*）

b.　*sipman-ul*　*sahA-ko*　*man-ul*　*swu-hom-i*　*i*
十萬 -ACC　辞する -CONJ　萬 -ACC　受 - する .NMLZR-NOM　これ
pwu-khocye　*h-o**m-ka***
富 - しようと　する -NMLZR-INT
「十萬を辞して萬を取るのが，富を積もうとすることか？」
（孟子諺解 4: 27b, *1590*）

c.　*Mayngca-i*　*kAlAsyatAy*　*esti pse*　*nil-o**m-ko***
孟子 -NOM　曰く　どうして　言う -NMLZR-INT
「孟子曰く，どうして言うのか？」　（孟子諺解 14: 13b, *1590*）
（以上，中世語コーパス資料）

体言化辞 *-m* を用いた動詞述語疑問文は，現代標準語と慶南方言には見られないが，済州方言には見られる。済州方言では，（19）のようなコピュラを用いた「動

[19] *cwuk-um*（死）の *-um* は，*-m* の前に挿入母音（いわゆる Bindevokal）が挿入されたものである。*cwuk-em* > *cwu-kem*（遺体）の *-am/em* は，すぐ後に述べる中世韓国語の *-om/wum* と共に文法的体言化を形成するものであり，*-m* の前に接続語尾 *-a/e* が挿入されて準体言が作られ，それが中世語の連綴式表記のまま固まって名詞となったと考えられる。伊藤（2012: 89）は，*-am/em* は完了接辞 *-a/e* と名詞派生接辞 *-m* が組み合わさって「～の結果なされたもの」の意味を表すと分析しているが，*-a/e* は *nal-a-kata*（飛んでいく）のように，必ずしも完了状況を表すわけではない。また，*el-um*（氷），*kuul-um*（すす）のように，*-a/e* がなくても，「凍った結果物」「焼け焦げた結果物」と理解できる例もある。

詞述語のK型コピュラ疑問文」も成立する（*-ka* は *-kwa* ともなる）[20,21]。

〈済州方言〉　① [[VP-*(u)m*]NMLZ]NP-*ka/ko*（K型：コピュラなし疑問文）
　　② [[VP-*(u)m*]NMLZ]NP-COP-*ka/ko*（動詞述語のK型コピュラ疑問文）

（18）a.　*nun*　*kongpwuy-hA-**m-kwa**,*　*co-**m-kwa**?*
あなた.TOP　勉強-する-PRS.NMLZR-INT　眠る-PRS.NMLZR-INT
「あなたは勉強しているのか，眠っているのか？」　（洪宗林 1975: 164）

b.　*cain*　*mwusike*　*mek-u**m-ko**?*
あの子.TOP　何　食べる-PRS.NMLZR-INT
「あの子は何を食べているのか？」

（19）a.　*nun*　*cikum*　*pap*　*mek-u**m-i-ka**?*
あなた.TOP　今　ご飯　食べる-PRS.NMLZR-COP-INT
「あなたは今ご飯食べているのか？」

b.　*cain*　*mwusike*　*mek-u**m-i-ko**?*
あの子.TOP　何　食べる-PRS.NMLZR-COP-INT
「あの子は何を食べているか？」

済州方言の体言化辞 *-m* は，それ自体が時制的に現在を表しており，コピュラなし疑問文でも動詞述語のK型コピュラ疑問文でも，眼前で現在進行中のアクチュアルな状況を指す（洪宗林 1975，鄭聖汝 2013 など）。体言化辞 *-m* の前に他の時制形式（現在・過去 / 完了・未来など）を挿入することはできない。

4.2. 体言化辞 *-n*, *-l* と名詞句用法標識 *-i*

4.3 節と 4.4 節では体言化辞 *-n*, *-l* を用いた動詞述語疑問文について述べるが，その前に体言化辞 *-n*, *-l* について少し解説を加える。

中世韓国語（及び古代韓国語）の体言化辞 *-n* は，動詞を基盤に準体言を作るものであった（南豊鉉 1996a, b）。（20a, b）のような事態準体言・項準体言（名詞句用法）もあれば，（20c）のような項準体言（修飾用法）もある。時制的には過去・完

[20] 筆者の調査によると，3 節で見た名詞述語疑問文と同様，動詞述語のK型コピュラ疑問文はコピュラなし疑問文より年齢による使用制約が少ない。

[21] 済州方言の場合，「動詞語幹＋接続語尾 *-a/e*」の後に *-m* が付くと，その後に必ず存在動詞 *-si*（ある・いる）が続く。それに疑問形式 *-ka/ko* を付ける場合は，*-si* に体言化辞 *-n* と名詞句用法標識 *-i* を付けた上で疑問形式を付けるため，*k* の弱化によりN型の *-n-y-a* が形成される。このN型にはコピュラではなく，存在動詞 *-si* が関与する。N型の成立に関する議論は 4.3 節を見られたい。

〈済州方言〉
cain　*cikum*　*pap*　*mek-e-**m-si-n-y-a**?*
あの子.TOP 今　ご飯　食べる-CONJ-PRS.NMLZR-いる-NMLZR-NPM-INT
「あの子は今ご飯を食べているのか？」

了とよく結びつくが，形容詞のような状態述語の場合は現在を表す。

〈中世語〉

(20)　a.　【事態準体言（名詞句用法）】

kutuy-s　*ho-**n***　*cocho*　*hAya*

あなた - の[22]　する -PRF.NMLZR (-ACC)　追う　して

「あなたの行なったのを追従して行ない」　（釋譜詳節 6: 8b, *1447*）

b.　【項準体言（名詞句用法）】

kAAmyelom-un　*motA-**n**-uy*　*wenmang-i-n-i*

豊かさ -TOP　集まる -PRF.NMLZR- の　願望 -COP-PRS.NMLZR-NPM

「豊かさはすべての人の願望であるなり」（富者衆之怨也）

（小學諺解 6: 83b, *1588*）

c.　【項準体言（修飾用法）】

ecey-nAn　*nimkum*　*ciSu-sya-**n***　*kul-i-la*

御製 -TOP　王　作る -HON-PRF.NMLZR　文章 -COP-IND

「御製とは，王がお造りになった文章である」　（訓民正音解例本 *1446*）

（以上，中世語コーパス資料）

体言化辞 *-l* も同様に，（21a, b）のような事態準体言・項準体言（名詞句用法）もあれば，（21c）のような項準体言（修飾用法）もある。時制的には，未来や意志などを表し，まだ現実化していない事態に結びつく。

〈中世語〉

(21)　a.　【項準体言（名詞句用法）】

cinsil-lo　*haynghA-**l**-Ay*[23]　*phyenuy-lAl*　*puth-ul-ssAy*

真実に　行う -FUT.NMLZR- の　便宜 -ACC　従うので

「本当に行なう人の便宜に従うので」　（禪宗永嘉集諺解下 : 13a, *1464*）

b.　【事態準体言（名詞句用法）】

nolay-lAl　*nooyya*　*sulphu-**l**-s*　*epsi*　*pulu-nA-n-i*

歌 -ACC　再び　悲しい -FUT.NMLZR- の　無く　歌う -PRS-NMLZR-NPM

「歌を再び悲しむことなく，歌うのである」　（杜詩諺解 25: 53a, *1481*）

---

[22] (20)，(21) の例文の逐語訳に「の」とあてた部分は，いわゆる属格標示（本論では体言基盤の体言化辞）である。このうち，*-s* は中世語では人に用いられる場合尊称名詞に付き（注 44 も参照），15 世紀では様々な異表記（*-k*, *-t*, *-p*, *-B*, *-H*, *-S*, *-z* など）を持つが，のちに *-s* への表記の単純化が起こる（Co Kyuthay 2010: 29–30 参照）。

[23] 査読者の一人は，*haynghA-l-Ay* は *hayngbAl-i-uy* から形式名詞 *-i* を省略したものであるので，この分析は誤りであると指摘した。しかし，黄善曄（1997）に基づくと，歴史的には *haynghAl* が先に成立し，*-i* は後で加わったものとして分析できる。注 11 も参照。

c. 【項準体言（修飾用法）】

hAma　*myengcongha-**l**-H*　*salAm-Al senak*　*mwutti*

もう　命終する -FUT.NMLZR- の　人 -ACC 善悪　聞く

mal-o

止める -POL.IMP

「間もなく命絶つであろう人に善悪のことを聞かないでください」

（月印釋譜 21: 125b, *1459*）

（以上，中世語コーパス資料）

体言化辞 *-n*, *-l* は，名詞句用法の場合，名詞句用法標識 *-i* を伴うこともある[24,25]。Shibatani（2017, 2018, 2019）によると，体言化辞に名詞句用法標識が加わる現象は日本語・琉球諸語その他にも観察される[26]。（22a, b），（23a）の *-n-i*, *-l-i* は，項準体言としてモノ・ヒトを表す。（22c），（23b）の *-n-i*, *-l-i* は事態準体言としてコトを表す。さらに *-l-i* は，（23c）のように未来の意味が強くなると，推測の意味を伴う。

〈中世語〉

（22）a. 【項準体言（名詞句用法）】

pal　*mulu*　*kou-**n-i**-wa*　*sAyngsyen*

足　柔らかく　煮る -PRF.NMLZR-NPM-COM　魚

*pti-**n-i**-wa*　*syoykoki*

蒸す -PRF.NMLZR-NPM-COM　牛肉

*kwuu-**n-i**-wa…*

焼く -PRF.NMLZR-NPM-COM

「豚足を柔らかく煮たのと魚蒸したのと牛肉焼いたのと…」

b. 【項準体言（名詞句用法）】

wuli　*hAn phan*　*twuwue*　*ci-**n-i***

私たち 1　局　置いて　負ける -PRF.NMLZR-NPM

*ikuy-**n-i***　*naki*　*ho-tAy*

勝つ -PRF.NMLZR-NPM　賭け　する . 意図 - こと .NOM

estehA-n-y-o?

どうだ -PRS.NMLZR-NPM-INT

---

[24] (22), (23) の *-i* は, 人を表す場合を除き, 現代韓国語訳ではすべて *kes* となる。このことから, 歴史的に *-i* > *kes* という展開があったと考えられる。中世語コーパス資料からもこの関係は確認できる（鄭，近刊 a）。

[25] 体言化辞 *-m* に名詞句用法標識は付かない。*-m* には *pipi.m-pap*（混ぜご飯）のような複合語を除き，文法的体言化には修飾用法がないため，名詞句用法だけに付く名詞句用法標識をわざわざ付ける必然性はない。

[26] 例えば,「鯉は焼いたが, いっちまいわね」（鯉は焼いたのが一番旨いね）〈出雲方言〉の「焼いた」は体言化された形であり，それだけで準体言を作れるが，標準日本語では「焼いた」に名詞句用法標識「の」が付く。

「私たち囲碁を一局終えて，負けた人，勝った人の勝敗を分けてみるのはどうだい？」

c. 【事態準体言（名詞句用法）】

elum tamun kulus anh-ey tAmka twumyen kAcang poti

氷　入れた　器　中 - に浸して　おけば　一番　見栄え

*tyohA-**n-i**-la.*

良い -PRS.NMLZR-NPM-IND

「氷を入れた器の中に浸しておけば，一番見栄えが良いのだ。」

（翻訳朴通事 *1517* 頃）（張淑英 2008: 22–23, 52）

（23） a. 【項準体言（名詞句用法）】

*nolay pulu-**l-i**-lan pull-e alpph-uy*

歌　歌う -FUT.NMLZR-NPM- とは　呼んで　前 -LOC

naSa-o-la hAya

出てくる -IMP　して

「歌を歌う人は，呼んで前に出てこい，といい」

b.【事態準体言（名詞句用法）】

kwanSin-tAlh-i hAma kaksan

官人 -PL-NOM すぐ　各散

*hA-**l-i**-loso-n-i,…*

する -FUT.NMLZR-NPM- 詠嘆 -NMLZR-NPM

「官人たちはもうすぐそれぞれに去っていくのであろうから，…」

c.【事態準体言から未来の推測へ】

mAl thA-si-l can hAna

馬　乗る -HON-FUT.NMLZR　杯　一つ

*patcAo-**l-i**-la.*

受け取る .POL-FUT.NMLZR-NPM-IND

「馬に乗られる（前に飲む）杯を一杯お受け取りになるであろう。）

（翻訳朴通事 *1517* 頃）（張淑英 2008: 24）

4.3. 体言化辞 *-n* を用いた動詞述語疑問文

中世語では，体言化辞 *-n* による準体言に名詞句用法標識 *-i* を付けて事態準体言（名詞句用法）を作り，それに疑問形式 *-ka/ko* を付けて動詞述語疑問文を作る[27]。その際，(*-n-i-ka*) > *n-i-a* > *n-i-ya* > *n-y-a*（Y/N-Q），(*-n-i-ko*) > *n-i-o* > *n-y-o*（WH-Q）のような *k* の弱化により（(*-n-i-ka*)，(*-n-i-ko*) は文献上現れない形），N 型が形成さ

[27] もし *-n* に付く *-i* がコピュラであれば，現代標準語では，その後に体言化辞 *-n* をさらに要求することになるため，この *-i* をコピュラと見なすのは困難である。*-i* がコピュラでないことを表す現象については 4.5 節参照。

れる[28]。体言化辞 *-n* の前には，動詞述語に付く現在時制 *-nA* や過去･完了の時制形式 *-(a)s* を挿入できる[29]。（24a）の *n-y-e* は母音調和によるもの。

〈中世語〉 [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM]NP-#*ka/ko* → [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM]NP-*a/o*（N 型）

（24） a.　*ney*　*tyohAn kolo*　*is-nA-**n-y**-e* (Y/N-Q)
あなた .NOM 良い　絹　ある -PRS-NMLZR-NPM-INT
「あなたは品質のよい絹を持っているのか」（你有好綾子麼）
（翻譯老乞大下 : 25a, *1517* 頃）

b.　*tasi*　*mwut-nola*　*ney*　*etule*　*ka-nA-**n-i**-o*　(WH-Q)…
再び 問う - のだ　あなた .NOM　どこへ　行く -PRS-NMLZR-NPM-INT
「再び尋ねるのだ。あなたはどこへ行くのか」（重問子何之）
（杜詩諺解 8: 6b–7a, *1481*）
（高恩淑 2011: 165, 170）

（25） a.　*syepangnim*　*onAl*　*ani*　*wa-n-nA-**n-y**-a*　(Y/N-Q)
旦那様　今日　否定　くる -PRF-PRS-NMLZR-NPM-INT
「旦那様は今日来ていないのか？」（順天金氏墓出土簡札 21, *1565–1575*）

b.　*ney*　*myes*　*peti*　*wa-s-nA-**n-y**-o*　(WH-Q)
あなた .NOM　いくつ　友 .NOM　くる -PRF-PRS-NMLZR-NPM-INT
encey　*o-**n-y**-o*
いつ　くる -PRF.NMLZR-NPM-INT
「あなたは何人の友が来ているのか？（来たのか？）…いつ来たのか？」
（你有幾箇火伴…従幾時來到…）　（翻譯老乞大下 : 5ab, *1517* 頃）
（高恩淑 2011: 159）

中世語の動詞述語疑問文の作り方は，現代標準語にも引き継がれている。ただし，現代標準語では，Y/N-Q と WH-Q の区別がなくなり，(*-n-i-ka*) > *-n-y-a* のみ残っている（(*-n-i-ka*) は文献上現れない形）。また，疑問形式を省略した *-n-i* だけでも疑問文が成立する。

〈標準語〉 ① [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM]NP-#*ka* → [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM]NP-*a*（N 型）
② [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM]NP-~~*a*~~（N 型）

---

[28] 13 世紀末～ 15 世紀初の「音讀口訣資料」で疑問形式が *-ka*, *-a* で現れるが，15 世紀の「ハングル諺解本」では，同じ箇所が *-nia* に変わっている例が見られる（高恩淑 2011: 111–112 参照）。また，高恩淑（2011: 479）によると，中世語（15―16 世紀）では Y/N-Q は *-nia*, *-niya*, *niye*, *-nye*, WH-Q は *-nio*, *-nyo* という体系をなし，*-nya* が見られるのは近代語（17―19 世紀）になってからである。歴史的に見ると，音讀口訣資料の時代に *-nia*, *nio* が見られ，中世語では *nia* と *niya*, *niye* が混在した状態が続く。*-niye*, *-nye* の存在は母音調和によるものであったが，近代語になるとこの系列は消える（高恩淑 2011 参照）。

[29] これは時制形式の発達に伴うものと考えられる。なお，（25a）の *wa-n-nA-* の *-n* は，過去・完了の *-(a)s* を発音通りに表記したものと見られる。

(26) a. *ne-n* *cikem* *pap* *mek(-nu)-**n-y-a**?* (Y/N-Q)
あなた -TOP 今 ご飯 食べる (-PRS)-NMLZR-NPM-INT
「あなたは今ご飯を食べているのか？」

b. *ne-n* *mayil* *nwukwu-hako* *pap-ul*
あなた -TOP 毎日 誰 - と ご飯 -ACC
*mek(-nu)-**n-y-a**?* (WH-Q)
食べる (-PRS)-NMLZR-NPM-INT
「あなたは毎日誰とご飯を食べているのか？」

(27) a. *ne-n* *achim* *pap-ul* *mek-ess-**n-y-a**?* (Y/N-Q)
あなた -TOP 朝 ご飯 -ACC 食べる -PST-NMLZR-NPM-INT
「あなたは朝ご飯を食べたのか？」

b. *ne-n* *ecey* *nwukwu-hako* *pap-ul*
あなた -TOP 昨日 誰 - と ご飯 -ACC
*mek-ess-**n-y-a**?* (WH-Q)
食べる -PST-NMLZR-NPM-INT
「あなたは誰とご飯を食べたのか？」

(28) a. *ne-n* *cikum* *pap* *mek-**n-i**?* (Y/N-Q)
あなた -TOP 今 ご飯 食べる -NMLZR-NPM
「あなたは今ご飯を食べているの？」

b. *ne-n* *ecey* *nwukwu-hako* *pap-ul*
あなた -TOP 昨日 誰 - と ご飯 -ACC
*mek-ess-**n-i**?* (WH-Q)
食べる -PST-NMLZR-NPM
「あなたは昨日誰とご飯を食べたの？」

慶南方言・済州方言でも，動詞述語疑問文の形成には体言化辞による動詞の準体言化が必須である。また，Y/N-Q と WH-Q の区別が保たれている（徐正穆 1987，洪宗林 1975，鄭承喆・金寶香 2013）。慶南方言では，体言化辞 *-n* に疑問形式 *-ka/ko* が直接付き，*k* が弱化して *-n-a*（Y/N-Q）/*-n-o*（WH-Q）となる（名詞句用法標識 *-i* がなくても *k* が弱化する理由は現時点では不明）。

〈慶南方言〉[[VP-*n*]NMLZ]NP-#*ka/ko* → [[VP-*n*]NMLZ]NP-*a/o*（N 型）

(29) a. *ni* *sipang* *pap* *mwuk-**n-a**?* (Y/N-Q)
あなた 今 ご飯 食べる -NMLZR-INT
「あなたは今ご飯を食べているのか？」

b. *ni* *me* *mwuk-**n-o**?* (WH-Q)
あなた 何 食べる -NMLZR-INT
「あなたは何を食べているのか？」

(30) a. *ni* *achim* *pap* *mwu-wun*(← *mwuk-ess*)-***n-a?*** (Y/N-Q)
あなた　朝　ご飯　食べる -PST-NMLZR-INT
「あなたは朝ご飯食べたのか？」

b. *ni* *wuncey* *pap* *mwu-wun*(← *mwuk-ess*)-***n-o?*** (WH-Q)
あなた いつ　ご飯　食べる -PST-NMLZR-INT
「あなたはいつご飯を食べたのか？」

済州方言の体言化辞 *-n* を用いた動詞述語疑問文は，標準語と同じように形成されるが，Y/N-Q は *-n-y-a*，WH-Q は *-n-i* を用いる [30]。

〈済州方言〉 [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM]NP-#*ka*
→ [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM]NP-*a*（N 型の Y/N-Q）
[[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM]NP-*ø*（N 型の WH-Q）

(31) a. *kai-n* *pelsse* *hAkkey* *ka-si-**n-y-a?*** (Y/N-Q)
その子 -TOP　もう　学校 .LOC 行く .CONJ- いる -NMLZR-NPM-INT
「あの子はもう学校に行ったのか？」

b. *kai-n* *enecey* *hAkkey* *wa-si-**n-i?*** (WH-Q)
その子 -TOP　いつ　学校 .LOC くる .CONJ- いる -NMLZR-NPM
「あの子はいつ学校に来たのか？」

4.4. 体言化辞 *-l* を用いた動詞述語疑問文

中世語では，体言化辞 *-l* を用いた動詞述語疑問文は，体言化辞 *-l* に名詞句用法標識 *-i* が付く場合（*k* の弱化あり）と付かない場合（*k* の弱化なし）がある [31]。次の例は，同時代の同じ文献において両者が共存する例である。ここでは WH-Q の例

---

[30] 済州方言の *-nya*, *-ni* の区別は厳密なものではなく，実際は，*kai-n enecey hAkey wa-si-nya?*（あの子はいつ学校へ来たのか？）のように，WH-Q にも *-nya* を許す傾向が見られる（鄭承喆・金寶香 2013）。しかし，Y/N-Q には *-ni* は用いられない。

[31] 古代語でも，名詞句用法標識 *-i* があっても *k* が弱化しない例が見られる。次の 2 例は，両方とも修辞疑問文であり，音韻環境も同一だが，中世語では *k* の弱化が起こっているが，古代語では起っていない。

〈古代語〉
asey *nayha-i-ta-malAn* *paSa-n-Al*
本来 私の -COP-IND- けれども　奪う -PRF.NMLZR-ACC
esti *hA-**l-i-ko***
どう する -FUT.NMLZR-NPM-INT
「本来僕のはずだが，（人が）奪ったのをどうしようか？（どうしようもない）」
（本矣吾下是如馬於隠奪叱良乙何如為理古）（處溶歌）　（洪起文 1956，金完鎮 1980 参照）
〈中世語〉
wuli *icey* *culki-ti ani* *hA-ko* *musu-il* *hA-**l-i-o**…*
私たち　もう 楽しむ - 否定　する -CONJ　どんな - 事　する -FUT.NMLZR-NPM-INT
「私たち，これから楽しまないで何をしようか？」（楽しもうじゃないか）
（咱如今不快活時做甚麼？）　（翻譯朴通事上，*1517* 頃）（張淑英 2008: 25）

をあげる。

〈中世語〉① [[VP-*l*]NMLZ-*i* NPM]NP-#*ka/ko* → [[VP-*l*]NMLZ-*i* NPM]NP-*a/o*
② [[VP-*l*]NMLZ]NP-*ka/ko*

(32) a. *nwu-lul　hAya　ka　et-ula　hA-**l-y-o**?*
誰 -ACC して　行く　得る -IMP する -FUT.NMLZR-NPM-INT
「誰に命じて，行ってもらって来い，と言おうか？」（着誰去討？）

b. *cyecey-s　swul-ul　hAya　o-n-tul*[32]
市場 - の 酒 -ACC　して　くる PRF.NMLZR-NPM.ACC
*esti　mek-u**l-ko**?*
どう 食べる -FUT.NMLZR-INT
「市場で酒を造ってきたのだが，（それを）どのように飲もうか？」
（街市酒打將来怎麼喫？）
（翻譯朴通事上，*1517* 頃）（張淑英 2008: 19）

標準語には，中世語の②のパタンと同様，用言基盤の体言化辞 *-l* の後に体言基盤の体言化辞 *-s* を挿入して疑問形式 *-ka* を付ける動詞述語疑問文がある（体言化辞 *-s* については，鄭，近刊 a, b を参照）[33]。この場合，*-l-s-ka* > *-l-kka* になり，疑問形式は濃音化して *-kka* となる[34]。意味的には，上記の中世語同様相手にその答えを求めるもの，相手に許可や同意を求めるもの，さらには疑い（独り言）を表すものもある。

〈標準語〉[[VP-*l*]NMLZ-*s*]NP-*ka* → [[VP-*l*]NMLZ]NP-*kka*（*-s* による濃音化）

(33) a. *wuli　icey　ettehkey　ha-**l-kka**?*　(WH-Q)
私たち もうすぐ　どのように　する -FUT.NMLZR-INT
「私たち，これからどうしようか？」（相手に答えを求める）

b. *wuli　icey　pap　mek-u**l-kka**?*　(Y/N-Q)
私たち もうすぐ　ご飯　食べる -FUT.NMLZR-INT
「私たち，これからご飯食べようか？」（相手に同意を求める）

c. *i　yak　nay-ka　mek-u**l-kka**?*　(Y/N-Q)
この 薬　私 -NOM　食べる -FUT.NMLZR-INT
「この薬，私が飲もうか？」（相手に許可を求める）

---

[32] *-tul* はいわゆる形式名詞（本論の名詞句用法標識）*-tA* と対格 *-ul* の融合形。

[33] 中世語では，*sol*（松）/*so-namwu*（松の木）のように，子音の前の *-l* はよく落ちる傾向にあった。疑問文において用言基盤の体言化辞 *-l* の後に体言基盤の体言化辞 *-s* が重複して付くようになったのは（(32b) で見るように中世語には *-s* がない），準体言を作るという文法的機能を維持しつつ，音声的にも *-l* を落とさないことから要請されたものと考えられる。

[34] 体言基盤の体言化辞 *-s* は丁寧体疑問文にも見られるが，それについては 5 節で取り上げる。

d.　*ilen*　*yak*　*nwu-ka*　*mek-**ul-kka**?*
こんな 薬　誰 -NOM　食べる -FUT.NMLZR-INT
「こんな薬，誰が飲むかしら」（独り言：疑い）

慶南方言と済州方言にも，動詞基盤の体言化辞 *-l* に体言基盤の体言化辞 *-s* を付けた動詞述語疑問文がある。慶南方言では，標準語同様疑問形式が濃音化して *-kka/kko* となり，済州方言では疑問形式が激音化して *-kha/kho* となる。（以下の例の括弧内の *-l* は，慶南方言では実現されてもされなくてもよいが，済州方言では実現されないのが普通。）

〈慶南方言〉[[VP-*l*]NMLZ-*s*]NP-*ka/ko* → [[VP-*l*]NMLZ]NP-*kka/kko*（*-s* による濃音化）

(34)　a.　*i*　*yak*　*wucci*　*mwu-wu**(l)***(← *mwuk-u(l)*)-***kko**?*　(WH-Q)
この 薬　どのように　食べる (-FUT.NMLZR)-INT
「この薬，どのように飲もうか？」（薬の服用方法を聞く）

b.　*omma,*　*na*　*cikum*　*pap*　*mwu-wu**(l)*** (← *mwuk-u(l)*)-***kka**?*　(Y/N-Q)
母ちゃん 私　今　ご飯　食べる (-FUT.NMLZR)-INT
「母ちゃん，私，いまご飯食べようか？」（食べていいか許可を求める）

〈済州方言〉[[VP-*l*]NMLZ-*s*]NP-*ka/ko* → [[VP-*l*]NMLZ]NP-*kha/kho*（*-s* による激音化）

(35)　a.　*wuli*　*mwusike*　*mek-u**(l)**-**kho/kha**?*[35]　(WH-Q)
私たち 何　食べる (-FUT.NMLZR)-INT
「私たち何を食べようか？」

b.　*wuli*　*cikum*　*pap*　*mek-u**(l)**-**kha**?*　(Y/N-Q)
私たち　今　ご飯　食べる (-FUT.NMLZR)-INT
「私たち今ご飯食べようか？」

現代語において体言化辞 *-l* を用いた動詞述語疑問文は，*-l* の後に名詞句用法標識 *kes* が用いられるものもある。また，体言化辞 *-n* の後にも *kes* が用いられるものがある。これらについては次節で述べる。

4.5. 名詞句用法標識 *kes* を用いた動詞述語疑問文

前節の中世語（32）のパタン①から見ると，現代語では体言化辞 *-l* の後に付く名詞句用法標識 *-i* が *kes* に変わるものがある。これは，下記で見るように，最終的にはN型のコピュラ疑問文を作ることになるが（ただし慶南方言は除く），特徴的なのは，二人称疑問文（主語が二人称）が多いことである。しかし，6.1 節で見るように，中世語の二人称疑問文には動詞基盤の体言化辞の後にいかなる名詞句用法標識（*-i*, *kes*）も現れない。つまり，体言化辞 *-l* を用いた二人称の動詞述語疑問文は，

[35] WH-Q に *-kha* が使えることは，Y/N-Q との厳密な区別がなくなり標準語のようになっていくことを意味するように思われる。注 30 も参照。

現代語では *-l* の後に名詞句用法標識 *kes* を用いるが，これによって，意味的には相手（二人称主語）のこれからの予定を聞くという機能を担うことになったと考えられる。体言化辞 *-n* の後にも名詞句用法標識 *kes* を付けることができるが，これも結果的にはN型のコピュラ疑問文となり，相手（聞き手）に説明を求めるという意味的機能が加わる。以下では，現代語において体言化辞 *-n*, *-l* の後に名詞句用法標識 *kes* が付いてN型のコピュラ疑問文が形成される様子を見ていく。

標準語では，名詞述語疑問文と同じく，*kes* の後にコピュラが続き，それに体言化辞 *-n* と名詞句用法標識 *-i* を付けて準体言化した上で，疑問形式 *-ka* を付ける。結果的に，*k* の弱化によりN型になる。疑問形式 *-a* (← *ka*) が脱落して，*-n-i* のみで疑問文を作ることもできる。いずれの場合も，動詞句と疑問形式の間に名詞句構造が二重に存在する複雑な構造になる[36,37]。

〈標準語〉① [[[[[VP-*n/l*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM]NP-#*ka*
→ [[[[[VP-*n*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM]NP-*a*（N型）
② [[[[[VP-*n/l*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM]NP-~~*a*~~（N型）

(36) *ne*　*cikum*　*mwue*　*mek-nu-**n-kes-i-n-y-a/n-i**?*（*-n* → N型）
あなた 今　何　食べる -PRS-NMLZR NPM-COP-NMLZR-NPM-INT/NMLZR-NPM
「あなた，今何を食べているのか？」

(37) *ne-nun*　*encey*　*pap-ul*
あなた -TOP　いつ　ご飯 -ACC
*mek-u**l-ke(s-i)-n-y-a/n-i**?*（*-l* → N型）
食べる -FUT.NMLZR NPM(-COP)-NMLZR-NPM-INT/NMLZR-NPM
「あなたはいつご飯を食べるつもりなの？」

慶南方言では，*kes* に疑問形式 *-ka/ko* を直接付けることも，*kes* にコピュラを付けて *-ka/ko* を付けることもできる。これは3節で見た名詞述語疑問文のコピュラなし疑問文とK型コピュラ疑問文の関係と同じであり，コピュラがあっても *k* が弱化せずに *kes-i-ka/ko* > *ke-i-ka/ko* > *k-i-ka/ko* となる[38]。体言化辞 *-l* を用いた場合は，動詞

---

[36] *kes* は話しことばでは普通 *-s* が脱落して *ke* となる。母音で終わる要素にコピュラが付く場合，コピュラは表面には現れないが，体言化辞 *-n* と名詞句用法標識 *-i* を付けて体言化することに変わりはないので，やはりN型になる。

ne　*cikum*　*mwue*　*mek-nu-**n**-ke-**n-y-a**/ke-**n-i**?*
あなた 今　何　食べる -PRS-NMLZR-NPM(-COP)-NMLZR-NPM-INT/NPM(-COP)-NMLZR-NPM
「あなた，今何を食べているのか？」

[37] 中世語にあった *-l-y-a* 形式が，修辞疑問を含む擬古的表現を除き，現代語において消失したのは，*-i* > *kes* という変化と関係があると思われる。

[38] コピュラを用いた形式は年齢による制約がなく広く用いられるが，コピュラのない形式は高年齢層しか使わない。3節で見た名詞述語疑問文のコピュラなし疑問文とK型コピュラ疑

基盤の体言化辞 *-l* の後に体言基盤の体言化辞 *-s* が入り，その影響で *-l-s kes-i-ka/ko* → *-l-skes-i-ka/ko* → *(l)-kk-i-ka/ko* のような濃音化が起こる。

〈慶南方言〉 ① [[VP-*n/l*]NMLZ-*kes* NPM]NP-*ka/ko*（K 型コピュラなし疑問文）
② [[VP-*n*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP-*ka/ko*（動詞述語の K 型コピュラ疑問文）
③ [[[VP-*l*]NMLZ-*s*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP-*ka/ko*（動詞述語の K 型コピュラ疑問文）（*-s* による濃音化）

(38) a. *ni sipang me mwuk-nu-n-**kes-ko**?* (WH-Q)
あなた 今 何 食べる -PRS-NMLZR NPM-INT
「あなた，今何を食べているのか？」

b. *ni sipang me mwuk-nu-n-**k-i-ko**?* (WH-Q)
あなた 今 何 食べる -PRS-NMLZR-NPM-COP-INT
「あなた，今何を食べているのか？」

(39) a. *ni wuncey pap mwuk-ul-**kes-ko**?* (WH-Q)
あなた いつ ご飯 食べる -FUT.NMLZR-NPM-INT
「あなたはいつご飯を食べるつもりなのか？」

b. *ni wuncey pap mwu-wu*(← *mwuk-u(l)*)-***kk-i-ko**?* (WH-Q)
あなた いつ ご飯 食べる (-FUT.NMLZR)-NPM-COP-INT
「あなたはいつご飯を食べるつもりなのか？」

c. *ni sipang pap mwu-wu*(← *mwuk-u(l)*)-***kk-i-ka**?* (Y/N-Q)
あなた 今 ご飯 食べる (-FUT.NMLZR)-NPM-COP-INT
「あなた今ご飯を食べるつもりなのか？」

済州方言は標準語と似ている（標準語の影響の可能性あり）。しかし，体言化辞 *-l* を用いた場合は，*-l* が疑問形式 *-ka/ko* を用いず，「*kes* ＋コピュラ＋ *-e*」の形を取るものもある（*-e* は平叙文・疑問文兼用）。やはり，用言基盤の体言化辞 *-l* の後に体言基盤の体言化辞 *-s* が入り，*-l-s kes-i-e* → *-l-skes-i-e* → *(l)-kh-i-e* → *(l)-kh-y-e* のような激音化が生じる。

〈済州方言〉 ① [[[[[VP-*n/l*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP]VP-*n*]NMLZ *-i* NPM]NP-#*ka*
→ [[[[[VP-*n/l*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP]VP-*n*]NMLZ *-i* NPM]NP-*a*（N 型）
② [[[VP-*l*]NMLZ-*s*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP-*e*（*-s* による激音化）

(40) a. *kauy.ney pap nu-ka mek-u**n-ke(s-i)-n-y-a**?*（*-n* → N 型）
その子 .PL ご飯 あなた -NOM 食べる -PRF.NMLZR-NPM(-COP)-NMLZR-NPM-INT
「あの子たちのご飯，あなたが食べたのか？」

問文の場合と同じく，動詞述語疑問文でもコピュラを用いた形式の方がより新しい表現と見られる。

b.　*kauy.ney*　*pap*　*nu-ka*　　*mek-u**l-ke(s-i)-n-y-a**?*（*-l* → N 型）
その子 .PL ご飯 あなた -NOM　食べる -FUT.NMLZR-NPM(-COP)-NMLZR-NPM-INT
「あの子たちのご飯，あなたが食べるつもりなのか？」

（41）*nu-n*　*cikum*　*pap*　*mek-u(**l**)-**kh**-**y**-e?*
あなた -TOP　今　ご飯　食べる -(FUT.NMLZR)-NPM-COP-IND
「あなたは今ご飯を食べるつもりなの？」

4.6. 非丁寧体動詞述語疑問文の形成

以上見てきた非丁寧体の動詞述語疑問文の形成をまとめると次のようになる[39]。

〈中世語〉

-m　[[VP-*o/wu-m*]NMLZ] NP-*ka/ko*　（K 型）
-n-i　[[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM] NP-#*ka/ko* → [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM] NP-*a/o*（N 型）
-l-i　[[VP-*l*]NMLZ-*i* NPM] NP-#*ka/ko* → [[VP-*l*]NMLZ-*i* NPM] NP-*a/o*
-l　[[VP-*l*]NMLZ] NP-*ka/ko*（K 型）

〈標準語〉

N 型　*-n-i*　① [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM] NP-#*ka* → [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM] NP-*a*
② [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM] NP-~~*a*~~
K 型　*-l-s*　[[VP-*l*]NMLZ-*s*] NP-*ka* → [[VP-*l*]NMLZ] NP-*kka*（*-s* による濃音化）
N 型　*-n-kes*　① [[[[[VP-*n*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-#*ka*
→ [[[[[VP-*n*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-*a*
② [[[[[VP-*n*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-~~*a*~~
N 型　*-l-kes*　① [[[[[VP-*l*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-#*ka*
→ [[[[[VP-*l*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-*a*
② [[[[[VP-*l*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-~~*a*~~

〈慶南方言〉

N 型　*-n*　[[VP-*n*]NMLZ] NP-#*ka/ko* → [[VP-*n*]NMLZ] NP-*a/o*（*k* 弱化の理由不明）
K 型　*-l-s*　[[VP-*l*]NMLZ-*s*] NP-*ka/ko* → [[VP-*l*]NMLZ] NP-*kka/kko*（*-s* による濃音化）

---

[39] 一貫性を保つためには，*-l* と *kes* の間にも *-s* を入れるべきであるが，標準語の表記システムに従って *-s* を入れなかった。これは，すべての *-l* と *-k* の間に *-s* が入ることを主張するものではない。例えば，*pwul-koki*（焼肉）の *-l* の後の *-k* は有声音化して，[pul-gogi] になる。しかし，体言化辞 *-l* の後の *kes* は標準語でも有声音化しない。また慶南方言と済州方言では，実際に濃音化や激音化が起こる。このことから，やはり動詞基盤の体言化辞 *-l* と名詞句用法標識 *kes* の間にも，体言基盤の体言化辞 *-s* が入ると見るべきであろう。

K 型　*-n-kes*　① [[VP-*n*]NMLZ-*kes* NPM] NP-*ka/ko*（コピュラなし疑問文）
② [[VP-*n*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP-*ka/ko*（動詞述語の K 型コピュラ疑問文）

K 型　*-l-(s)-kes*　① [[VP-*l*]NMLZ-*kes* NPM] NP-*ka/ko*（コピュラなし疑問文）
② [[[VP-*l*]NMLZ-*s*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP-*ka/ko*
→ [VP-*(l)-kk*] NP-*i-ka/ko*（動詞述語の K 型コピュラ疑問文）

〈済州方言〉

K 型　*-m*　① [[VP-*(u)m*]NMLZ] NP-*ka/ko*（コピュラなし疑問文）
② [[VP-*(u)m*]NMLZ] NP-COP-*ka/ko*（動詞述語の K 型コピュラ疑問文）

N 型　*-n-i*　① [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM] NP-#*ka* → [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM] NP-*a*　（Y/N-Q）
② [[VP-*n*]NMLZ-*i* NPM] NP-*ø*　（WH-Q）

K 型　*-l-s*　[[VP-*l*]NMLZ-*s*] NP-*ka/ko* → [[VP-*l*]NMLZ] NP-*kha/kho*（*-s* による激音化）

N 型　*-n-kes*　[[[[[VP-*n*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-#*ka*
→ [[[[[VP-*n*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-*a*

N 型　*-l-kes*　[[[[[VP-*l*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-#*ka*
→ [[[[[VP-*l*]NMLZ-*kes* NPM] NP-COP]VP-*n*]NMLZ -*i* NPM] NP-*a*

その他　*-l-s-kes*　[[[VP-*l*]NMLZ-*s*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP-*e* → [VP-*(l)-kh*]NP-*i-e*

重要なのは次の点である。

韓国語の動詞述語疑問文は，中世韓国語から現代語（標準語，慶南方言，済州方言）に至るまで，一貫して「準体言＋疑問形式 *-ka/ko*」という構造を有する。実現すると K 型と N 型になる。N 型の疑問文はすべて疑問形式 *-ka/ko* の *k* が弱化したことにより形成されたものであり，*k* の弱化には名詞句用法標識 *-i* が重要な役割を果たしている。

動詞述語疑問文に見られる言語間の目立つ相違は，標準語が名詞述語文同様 N 型を発達させているのに対し，慶南方言は中世語の名詞述語疑問文同様 K 型を維持していることである。動詞述語疑問文においても K 型が成立するのは，(i) 体言化辞 *-l*, *-l-s* を用いた疑問文すべて（中世語，標準語，慶南方言，済州方言），(ii) 体言化辞 *-m* を用いた疑問文すべて（中世語，済州方言），(iii) 名詞句用法標識 *kes* を用いた慶南方言の疑問文の三種類である。体言化辞 *-l* と *-l-s* の関係は，歴史的変化と関係すると考えられる。中世語では *-l* に *-s* が付かないが，現代語では *-s* が付いた結果，濃音化が起こる（注 33 参照）。標準語は唯一ここだけが K 型である。

名詞句用法標識 *kes* を用いた動詞述語疑問文は現代語の特徴であるが，これは中世語で *-n-i*, *-l-i* を用いた疑問文が，体言化辞 *-n*, *-l* の後の名詞句用法標識 *-i* が *kes*

に変わったことで形成されたものと見られる。また，*kes* を用いるとその後にコピュラが現れ，コピュラ疑問文にもなる（標準語，済州方言，慶南方言の一部）。慶南方言では，*kes* を用いてもコピュラが現れず K 型の疑問文になるものと，*kes* の後にコピュラが現れても N 型にならず，K 型を維持するものの二種類がある。これは，済州方言の体言化辞 *-m* を用いた K 型の二種類の疑問文と同じパタンであり，3 節で見た慶南方言・済州方言の名詞述語疑問文とも同じパタンである。名詞述語文同様，コピュラなし疑問文よりコピュラ疑問文のほうが新しい形式であると考えられる。

コピュラを有する動詞述語疑問文は，名詞句用法標識 *kes* と共に現れた現代語の特徴であるが，大きく二方向への展開が見られる。現代標準語はコピュラが動詞述語疑問文の方に統一した結果，K 型の疑問形式は現れず，N 型の *-nya/ni* が現れたと説明できる。つまり，標準語ではコピュラを含む要素が動詞句（VP）となり，それをさらに準体言にする必要があったため，結果として，N 型のコピュラ疑問文が成立する。逆に言えば，*kes* を用いた N 型の疑問文ならば，すべてコピュラ疑問文である。一方，慶南方言は従来の名詞述語疑問文のパタンを継続させていくものである。つまり，動詞述語疑問文が有するコピュラ（すなわち [[[VP+*n/l*]NMLZ-*kes* NPM]NP-COP]）を名詞述語疑問文が有するコピュラ（すなわち [NP-COP]）と同一に扱った結果，K 型コピュラ疑問文が成立する。

最後に，韓国語の動詞基盤の体言化辞は，準体言を作る機能以外に，時制やアスペクトも担う。*-m* は現在，*-l* は未来を表すが，体言化辞 *-n* はそれ自体で現在・過去（完了）を表す一方，その前に動詞述語に付く現在形・過去形の時制形式をさらに挿入でき，時制に関して柔軟な対応ができたことで，発達してきたものと見られる。

5. 丁寧体疑問文

本節では丁寧体疑問文の形成について検討する。現代標準語の丁寧体疑問文 *-p-n-i-kka* は，「敬語形式 *-p* ＋体言化辞 *-n* ＋名詞句用法標識 *-i* ＋疑問形式 *-ka*」という構造を持つと考えられる。*-i* に続く *k* は弱化せず，濃音化して *-kka* となる。同様の濃音化は慶南方言にも見られる。また，丁寧体疑問文になると，Y/N-Q と WH-Q の形式上の区別がなくなる。*-kka* を聞き手敬語の疑問形式と表記する。

〈標準語〉

(42) a. *ce pwun-un sensayngnim-i-**p-n-i-kka?*** (Y/N-Q)
あの 方 -TOP 先生 .HON-COP-POL-NMLZR-NPM-POL.INT
「あの方は先生ですか？」

b. *halapeci-nun tayk-ey keysi-**p-n-i-kka?*** (Y/N-Q)
おじいさん -TOP お宅 -LOC いらっしゃる -POL-NMLZR-NPM-POL.INT
「おじいさんはお家にいらっしゃいますか？」

c. *halmeni-nun* *encey* *cip-ey* *ka-si-l-ke(s-i)-**p-n-i-kka**?* (WH-Q)
おばあさん -TOP いつ 家 -LOC 行 く -HON-FUT.NMLZR-NPM (-COP)-POL-NMLZR-NPM-POL.INT
「おばあさんはいつお家に帰られるつもりですか？」

〈慶南方言〉

(43) a. *ce* *pwun-i* *wuli* *seyngnim-i-**p-n-i-kke**?* (Y/N-Q)
あの 方 -NOM 私たち 先生 .HON-COP-POL-NMLZR-NPM-POL.INT
「あの方が私たちの先生ですか？」

b. *halpay-nun* *tayk-ey* *keysi-**p-n-i-kke**?* (Y/N-Q)
おじいさん -TOP お宅 -LOC いらっしゃる -POL-NMLZR-NPM-POL.INT
「おじいさんはお家にいらっしゃいますか？」

c. *halmay-nun* *wuncey* *cip-ey* *ka-si(-l)-kk-i-**p-n-i-kke**?* (WH-Q)
おばあさん -TOP いつ 家 -LOC 行く -HON(-FUT.NMLZR)-NPM-COP-POL-NMLZR-NPM-POL.INT
「おばあさんはいつお家に帰られるつもりですか？」

丁寧体疑問文の疑問形式が濃音化した *-kka* となることには，中世語の丁寧体疑問文において，*-n-i* と *-ka* の間に *-s* が入ることと関係すると見られる[40]。

(44) a. *kutuy-s* *apanimi* *is-nA-**n-i-s-ka***
そなた -NMLZR お父様 .NOM いる -PRS-NMLZR-NPM-POL.NPM-INT
「あなたのお父様はいますか？」（釋譜詳節 6: 14, *1447*）

b. *estyey* *pwuthye-y-la* *hA-nA-**n-i-s-ka***
どうして 仏陀 -COP- 断定 する -PRS-NMLZR-NPM-POL.NPM-INT
「どうして仏陀であると言うのですか？」（釋譜詳節 6: 16, *1447*）
（許雄 1975: 666）

本論では，この *-n-i* と *-ka* の間の *-s* は中世語の体言基盤の体言化辞（いわゆる属格（安秉禧 1968，安秉禧・李光鎬 1990））のうち，尊称名詞に結びつく体言化辞 *-s* が尊称の名詞句用法標識として援用されたものと考える（体言化辞と名詞句用法

[40] 中世語には，*-ni-s-ka* より丁寧度が高く，現代語の *-p-ni-kka* と同程度の丁寧の疑問表現 *-ni-I-s-ka* がある（李賢熙 1982）。黄善曄教授（個人談話，2017 年 9 月 14 日）によると，この *-I* が文献上に登場したのは中世語になってからであり，中世語以前の鄕歌や吏讀，釈讀口訣の資料には現れない。これに基づくと，志部（1972: 9）が主張したように，*ni-s-ka* は *ni-Is-ka* から *-I* が脱落して形成されたものではないことになる。一方，*-ni-s-ka* は新羅時代の鄕歌や高麗時代の釈讀口訣にも例がある。なお，この *-s* は疑問文に現れ，平叙文には現れない。朴鎮浩（1998）によると，釈讀口訣資料には *-ni-a-s-ko* があり，これが後に現れる中世語の *-ni-I-s-ka* と同程度の聞き手敬語として用いられている。

標識の区別については Shibatani 2017, 2018, 2019 および鄭，近刊 a 参照）[41]。中世語の丁寧体疑問文は「[[[VP-*n/l*]NMLZ-*i* NPM]NP-*s* NPM]NP-*ka/ko*」という構造を持ち，名詞句用法標識 *-i* と尊称の名詞句用法標識 *-s* が重ねて用いられていると考えるわけである [42]。言い換えると，尊称の意味を表すために，名詞句用法標識の重複が許されたものと考えられる。

次は，中世語において人間の場合，尊敬の対象に尊称の体言化辞 *-s* が，そうでない対象に平称の体言化辞 *-Ay*（母音調和により *-uy* が *-Ay* となる）が用いられた例である（詳細は鄭，近刊 b 参照）。

【平称の体言化辞】（いわゆる属格）

（45）a.　*kyecipcyong-**Ay** piti*「女中の謝金が」　（月印釋譜 8: 81b, *1459*）
　　b.　*cwungsayng-**Ay** sakokAl*「衆生の邪曲を」　（釋譜詳節 6: 22a, *1447*）
　　c.　*salAm-**Ay** momAl*「人の体を」　（釋譜詳節 6: 11a, *1447*）

【尊称の体言化辞】（いわゆる属格）

（46）a.　*seycon-**s** mal*「世尊の言葉」　（月印天降之曲 1b, *1447*）
　　b.　*pwuthye-**s** atAl*「仏陀の息子」　（釋譜詳節 13: 18, *1447*）
　　c.　*yaksayelay-**s** ilhwumul*「薬師如来のお名前を」　（釋譜詳節 9: 20b, *1447*）

この *-s* は，現代語の尊称与格 *-kkey* の形成にも関係する。中世語において，平称与格は *-Ay/uy* と *kuey*（そこ）の組み合わせにより，また，尊称与格は *-s* と *kuey* の組み合わせによって作られた（*kuey* は場所の代名詞。安秉禧・李光鎬 1990: 179, Co Kyuthay 2010: 85–94 など）。現代語の尊称与格 *-kkey* は，[NP-*s kuey*] → [NP-*skuey*] → [NP-*kkey*] のような変化を経て成立したと考えられている [43]。

【平称与格】[NP-*Ay/uy kuey*] > [NP-*eykey*]

（47）a.　*nay*　*kuey (> key) >*　*naykey*「私に」
　　私 . の　そこ　　私 .DAT

---

[41] この *-s* は，古代語の新羅鄕歌の「祭亡妹歌」にも見られる。また，名詞 *mal*（言葉）に（体言基盤の）体言化辞 *-s* が付いて，今話したその言葉の内容を具体的に指すという指示的機（referential fuction）を表す例も含まれている。

na-nAn　*ka-nA-ta*　*mal-**s**-to*　*mot*　*ta*　*nilu-ko*
私 -TOP 行く -PRS-IND　言葉 -NMLZR- も　不可能　すべて　告げる -CONJ
*ka-nA-**n-i-s-ko***　（祭亡妹歌）『三国遺史』（*1281*）
行く -PRS-NMLZR-NPM-POL.NPM-INT
「私は行くと，そのことも言えず，（どうして）行ってしまうのですか。」
（吾隱去内如辭叱都 毛如云遺去内尼叱古）　（cf. 洪起文 1956: 255–256）

[42] 元来体言化辞であった形式が名詞句用法標識として用いられることや，それが重ねて用いられることについては，Shibatani and Shigeno（2013）を参照。

[43] この音韻変化は 16 世紀以降起こったものといわれている。

b.　*cwungsayng-**Ay***　*kuey (> key)* >　*cwungsayng-**eykey***「衆生に」
　衆生 - の　そこ　衆生 -DAT

c.　*kyecip-**uy***　*kuey (> key)* >　*yeca-**eykey***「女に」
　女 - の　そこ　女 -DAT

【尊称与格】[NP-*s kuey*] > [NP-*kkey*]

（48）a.　*wang-**s** kuey*　>　*wang*　*skuey (> skey)*　>　*wang-kkey*「王に」
　王 - の そこ　王　のそこ　王 -HON.DAT

b.　*pwuthye-**s** kuey* >　*pwuthye*　*skuey (> skey)*　>　*pwuche-kkey*「仏陀に」
　仏陀 - の そこ　仏陀　のそこ　仏陀 -HON.DAT

（安秉禧・李光鎬 1990: 179，Co Kyuthay 2010: 85–94 参照）

体言化辞 *-s* はさらに，次のように，動詞基盤の体言化辞 *-l* と合わさって事態準体言（名詞句用法）を作る[44,45]。動詞基盤の体言化辞 *-l* と体言基盤の体言化辞 *-s* の連続は，4 節で見た動詞述語疑問文にも見られる。

（49）*nolay-lAl*　*nooyya*　*sulphu-**l-s***　*epsi*　*pulu-nA-n-i*（=(21b)）
　歌 -ACC　再び　悲しい -FUT.NMLZR-NMLZR　無く　歌う -PRS-NMLZR-NPM
　「歌を再び悲しむことなく，歌うのである」（事態準体言・名詞句用法）
（杜詩諺解 25: 53a, *1481*）（中世語コーパス資料）

現代語の丁寧体疑問形式 *-kka* も，中世語において尊称の名詞句用法標識 *-s*（元来は体言化辞）に疑問形式 *-ka* が付き，*-s-ka* > *-ska* のように再分析され，濃音化現象を引き起こした結果と考えられる。

現代標準語の丁寧体疑問形式 *-kka* は聞き手敬語を表す *-p* と共に現れ *-p-n-i-kka* になる（尊称の *-s* がなければ *-p* も消えて，N 型の *-nya* になる）が，済州方言では *-wu-kkwa* となり，聞き手敬語を表す *-wu* を伴う。

---

[44] 中世語では，尊敬の対象の人間だけでなく，むしろ無生物の場合に *-s* が多く用いられた（現代語では人間には使えず，無生物のみとなる）。尊敬の対象でない人に *-s* が用いられる例も見つかるが，それにはこのような事情から尊称と平称の境界が曖昧になったことと無関係ではないように思われる。

[45] *sey-s*, *ney-s*, *yele-s* など「数詞 + *-s*」の *-s* も，日本語の「一つ，二つ」の「つ」と同様，数概念と合わさって指示対象を具体化する機能をもつ（鄭，近刊 a, b）。体言化辞 *-s* は，歴史的には用言基盤の体言化にも用いられた可能性がある。中世語に 2 例，*nol-A-s*（遊ぶ - 挿入母音 *-s*：遊び，いたずら）と *pAyhA-s*（習う *-s*：癖，習慣）が見つかっている（例は黄善曄教授による）。

〈済州方言〉

(50) a. *samchwun cikum eti ka(-a)-m-s(i)-**wu-kkwa**?*[46] (WH-Q)
おばさん 今 どこ 行く (-CONJ)-PRS.NMLZR- いる -POL-POL.INT
「おばさん，今どこに行っているところですか？」

b. *halapang cikum pap mek-u(l)-kh-**wu-kkwa**?* (Y/N-Q)
おじいさん 今 ご飯 食べる -(FUT.NMLZR)-NPM-POL-POL.INT
「おじいさん，今すぐお食事されますか？」

c. *cikum kongpwuy-hA-m-i-**wu-kkwa**.* (Y/N-Q)
今 勉強 - する -PRS.NMLZR-COP-POL-POL.INT
「今勉強していますか？」

6. その他の疑問文――二人称疑問文と間接疑問文――

韓国語の疑問文には，ここまで述べてきた非丁寧体・丁寧体の疑問文のほかに，二人称疑問文と間接疑問文がある。これらの疑問文においても，疑問文の形成には疑問形式の前に，やはり体言化辞が必要である。

6.1. 二人称疑問文

中世語には，主語が聞き手の場合に二人称専用の疑問形式 *-ta* が用いられる二人称疑問文があった（許雄 1975: 495）。この二人称疑問文は，現代語では済州方言に残っている。中世語でも済州方言でも，二人称疑問文には疑問形式の前に体言化辞が用いられ，準体言が作られる。

中世語の二人称疑問文は，名詞述語疑問文の場合は必ずコピュラが用いられ，コピュラに動詞基盤の体言化辞 *-n* が付加されて二人称疑問形式 *-ta* が付く。動詞述語疑問文の場合は，動詞に体言化辞 *-n*, *-l* を付けたもの（子音語幹の後は挿入母音 *-u* が必要）に *-ta* が付く。いずれの場合も 4 節で見た動詞述語疑問文と異なり，体言化辞 *-n*, *-l* の後に名詞句用法標識 *-i* は現れない。（現代標準語では，体言化辞 *-l* の後の *-i* が名詞句用法標識 *kes* に変わり，相手の予定を聞く二人称の疑問表現となる。4.5 節参照）

〈中世語〉　名詞述語疑問文　[[NP-COP-*n*]NMLZ]NP-*ta*
　　動詞述語疑問文　[[VP-*(u)n/l*]NMLZ]NP-*ta*

---

[46] 査読者の一人から，この *-m-s* の配列は 15 世紀語の *-omsta* や現代語の *(kuli) ha-m-s-ey*「（そう）するからね」などとの関連が指摘され得るというコメントがあった。しかし，この現代語の例は動詞語幹に *-(u)m* が付くものであり，（50a）は接続語尾 *-a/e* の後に *-m* がくるため，両者は異なるものである（4.1 節及び注 19 参照）。張景俊他（2015: 63–65）によると，述語に付く *-m-s* の配列は鄕歌や釋讀口訣資料にもよく見られ，当為性（義務）や可能の意味に用いられている。また，中世語になると，唯一の例が『三鋼行實圖』（1481）に見られることが指摘されている。

(51) a. *nehuy susung-i nwuy-mye nwuy*
貴方 .PL 恩師 -NOM 誰 - であり 誰の
*ceyca-i-**n-ta***
弟子 -COP-PRS.NMLZR-2.INT
「貴方達の恩師は誰であり，誰の弟子なのか？」（法華經 7: 134–5, *1463*）

b. *ney estey a-**n-ta***
あなた .NOM どうして 知る -PRF.NMLZR-2.INT
「あなたはどうして知っているのか？」（月印釋譜 23: 74, *1459*）

c. *ney pali-lAl etuy ka et-u**n-ta**.*
あなた .NOM 鉢 -ACC どこ 行って 得る -PRF.NMLZR-2.INT
「あなたは鉢（僧侶の食器）をどこに行ってもらったのか？」
（月印釋譜 7: 8, 1459）

d. *sAlanghA-noni kutuy-nAn enucek-uy tola o-**l-ta***
思う - が 貴方 -TOP いつ -LOC 帰って くる -FUT.NMLZR-2.INT
「思うが，あなたはいつ帰ってくるつもりなのか？」(杜詩諺解 22: 30, *1481*)
（許雄 1975: 497-499）

済州方言の場合，Y/N-Q は *-ta*，WH-Q は *-ti* が用いられる（最近はこの区別もなくなりはじめ，WH-Q が *-ta* 系に統合される傾向にある）。また，動詞述語疑問文には次のような中世語と異なる特徴が見られる。(i) 体言化辞に *-m* も使える。(ii) 体言化辞 *-l* は動詞語幹に直接付くが，体言化辞 *-m*, *-n* は「動詞語幹＋接続語尾 *-a/e*」に付く。(iii) *-ta/tha*, *-tya/thya*, *-ti/thi* などの変種が見られる[47]。やはり，体言化辞 *-l* の後の疑問形式は中世語と異なり，激音化が起こる。中世語の場合と同様，名詞句用法標識 *-i* は現れず，また名詞述語疑問文では必ずコピュラが現れる。

〈済州方言〉 名詞述語疑問文：[[NP-COP-*n*]NMLZ]NP-*ta/ti*
動詞述語疑問文：① [[VP-*a/e-m/n*]NMLZ]NP-*ta/ti*
② [[VP-*(u)l*]NMLZ]NP-*tha/thi*

(52) a. *nun nwukey cip ttAl-i-**n-ti**?* (WH-Q)
あなた .TOP 誰の 家 娘 -COP-PRS.NMLZR-2.INT
「あなたは誰の家の娘なのか？」

b. *nun pap mek-e-**n-ta/tya**?* (Y/N-Q)
あなた .TOP ご飯 食べる -CONJ-PRF.NMLZR-2.INT
「あなたはご飯を食べたのか？」

c. *nun etise sal-a-**m-ti**?* (WH-Q)
あなた .TOP どこで 暮らす -CONJ-PRS.NMLZR-2.INT
「あなたはどこで暮らしているのか？」

[47] このような中世語との違いが何を意味するかは，さらなる研究が必要であろう。

d. *nu* *mwusike* *mek-**ul-thi?*** (WH-Q)
あなた 何 食べる -FUT.NMLZR-2.INT
「あなたは何を食べたいのか？」

e. *nun* *hAkkom* *istang* *cip-uy* *ka-**l-tha/thya?*** (Y/N-Q)
あなた .TOP 暫く いる .CONJ 家 -LOC 行く -FUT.NMLZR-2.INT
「あなたは暫くしてから家に帰るつもりなのか？」

6.2. 間接疑問文

間接疑問文も，中世語は *-ka/ko*，慶尚方言は *-ka/ko*, *-kka/kko*，済州方言は *-ka/ko* 及び *-ti*，標準語は *-ci* のように疑問形式は異なるが，体言化辞 *-n*, *-l* の後に疑問形式が付く点は一貫している。直接疑問文の場合と同様，K 型の疑問形式 *-ka* と *-ko* が Y/N-Q と WH-Q の違いによって使い分けられる。直接疑問文と異なる点は，(i) 体言化辞の後に名詞句用法標識 *-i* が現れない，(ii) 名詞述語疑問文では必ずコピュラが要求されることである。これは，3 節で見た中世語，慶南方言，済州方言の名詞述語疑問文がコピュラなし疑問文を作れることと大きく異なる。名詞述語疑問文にコピュラが現れるのは，その後に動詞基盤の体言化辞 *-n*, *-l* が用いられることと関連し，また，名詞句用法標識 *-i* が現れないのは，N 型の疑問形式が現れないことと関係する。また，慶尚方言は中世語と異なり，体言化辞 *-l* に付く疑問形式は濃音化が起こる。済州方言の間接疑問文は未来を表す体言化辞 *-l* が用いられると，さらに名詞句用法標識 *kes* とコピュラが続き，最終的には体言化辞 *-n* と疑問形式 *-ti* を用いる。

〈中世語〉 名詞述語疑問文 [[[NP-COP-*n*]NMLZ]NP-*ka/ko*]
動詞述語疑問文 [[[VP-*n/l*]NMLZ]NP-*ka/ko*]

(53) a. *salAm-i-**n-ka*** *salAm* *an-i-**n-ka*** *hAya*
人 -COP-NMLZR-INT 人 否定 -COP-NMLZR-INT して
uysim *tABAyni*
疑心 なるので
「人なのか人でないのか，と疑うことになるので」(月印釋譜 1: 15a, *1459*)

b. *thayca-i* *apanim-s* *chikse-i-si-**n-ka*** *nekye*
太子 -NOM お父様 - の 勅書 -COP-HON-NMLZR-INT 思って
「太子が，お父様の御勅書でいらっしゃるのか，と思って」
(釋譜詳節 24: 51a, *1447*)

c. *esten* *yen-Alo* *tuk* *hA-**n-ko*** *uysim*
どんな 縁 - で 得 する -PRF.NMLZR-INT 疑心
hA-n-i-la
する -NMLZR-NPM-IND

「どのような縁があって（それを）得たのか，と疑っているのである。」
（月印釋譜 15: 33a, *1459*）

d. *yusim-hA-n*　*kilh-ey*　*hay*　*kil*　*nay-**l-ka***
幽深 - する -NMLZR　道 -LOC　太陽　道　出す -FUT.NMLZR-INT
cen-no-la
伝える -NMLZR. 詠嘆 -IND
「幽深な道に太陽の道を作ろうか，と伝えるのだ。」
（杜詩諺解 25: 17a, *1481*）
（以上，中世語コーパス資料）

〈標準語〉 名詞述語疑問文　[[[NP-COP-*n/l*]NMLZ]NP-*ci*]
動詞述語疑問文　[[[VP-*n/l*]NMLZ]NP-*ci*]

(54) a. *cyay-nun*　*nwukwu*　*atul-i-**n/l-ci***　*molu-keyss-ta.*
あの子 -TOP　誰　息子 -COP-NMLZR-INT　知らない - 推測 -IND
「あの子は誰の息子｛なのか / になるのか｝，わからない。」

b. *ku salam-i*　*na-eykey*　*nay-ka*　*cal*
その人 -NOM　私 -DAT 私 -NOM　よく
*sa-nu-**n-ci**(-lul)*　*mwul-ess-ta.*
暮らす -PRS-NMLZR-INT(-ACC)　聞く -PST-IND
「あの人が私に，私が幸せに暮らしているのか（を）聞いた。」

c. *ku*　*ai-ka*　*yeki-ey*　*tasi*　*o-**l-ci***
その子 -NOM　ここ -LOC　再び　くる FUT.NMLZR-INT
molu-keyss-ta.
知らない - 推測 -IND
「あの子はまたここにくるのか（どうか），わからない。」

〈慶南方言〉 名詞述語疑問文　[[[NP-COP-*n*]NMLZ]NP-*ka/ko*]
動詞述語疑問文　[[[VP-*n/l*]NMLZ]NP-*ka/ko*] (-*l* の後は *kka/kko*)

(55) a. *ya-ka*　*ttal-i-**n-ka***　*atel-i-**n-ka***
この子 -NOM　娘 -COP-NMLZR-INT　息子 -COP-NMLZR-INT
moli-kes-ta.
知らない - 推測 -IND
「この子は娘なのか息子なのか，わからない。」

b. *ya-nun*　*nwu ttal-i-**n-ko***　*mwul-e-po-ala.*
この子 -TOP　誰　娘 -COP-NMLZR-INT　聞く -CONJ- 見る -IMP
「この子は誰の娘なのか，聞いてみて。」

c. *ni-ka*　*ecey*　*cip-ey*　*cal*　*ka-ss-nu-**n-ka***
あなた -NOM　昨日　家 -LOC よく　行く -PRF-PRS-NMLZR-INT

mwut-te-la.
聞く - 回想 -IND
「あなたが昨日無事に家に帰ったのか，（誰かが）聞いていた。」

d. *ilel-ttay　wucca-mo　co-u(**l**)-**kko***
このような - 時　どのようにしたら　良い -FUT.NMLZR-INT
moli-kes-ta.
知らない - 推測 -IND
「このような時にはどうしたらいいのか，わからない。」

〈済州方言〉　名詞述語疑問文　① [[[NP-COP-*n*]NMLZ]NP-*ka/ko*]
② [[[NP-COP-*n*]NMLZ]NP-*ti*]
動詞述語疑問文　① [[[VP-*n*]NMLZ]NP-*ka/ko*]
② [[[VP-*n*]NMLZ]NP-*ti*]
③ [[[VP-*l*]NMLZ-*kes*NPM]NP-COP-*n*]NMLZ]NP-*ti*]

(56) a. *ike　nwukey　cheyk-i-**n-ko**　kang　al-a-po-ang*
これ 誰の　本 -COP-NMLZR-INT　行って　知る - 見る -CONJ
o-la-i.
くる -IMP-SP
「これは誰の本なのか，行って，調べてきてね。」

b. *omeykittek　ta　mek-e-si-**n-ka***
オメギ餅　全部　食べる -CONJ- いる -NMLZR-INT
mollu-khwu-ta.
知らない - 推測 .POL-IND
「オメギ餅を全部食べたのか（どうか），わかりません。」

c. *yosay　ta-tel　mwues-tel*
この頃 皆 -PL　何 -PL
*mek-e-m-si-**n-ko***
食べる -CONJ-PRS.NMLZR- いる -NMLZR-INT
mollu-khwu-ta.
知らない - 推測 .POL-IND
「最近皆様はどんな物を食べているのか，わかりません。」

(57) a. *cain　nwukey　atel-i-**n-ti***
あの子 -TOP　誰の　息子 -COP-NMLZR-INT
mollu-khwu-ta.
知らない - 推測 .POL-IND
「あの子は誰の息子なのか，わかりません。」

b.　*ku*　*nomppi-n*　*mek-e-si-**n-ti**-sa*
その大根 -TOP　食べる -CONJ- いる -NMLZR-INT- 強調
mollu-khwu-ta.
知らない - 推測 .POL-IND
「その大根は食べたのか（どうか），わかりません。」

c.　*aphulo*　*mwusike*　*mek-eng*
これから 何 -PL　食べる -CONJ
*sa(l)-**l-kes-i-n-ti**-sa*　*mollu-khwu-ta.*
暮らす -FUT.NMLZR-NPM-COP-INT- 強調 知らない - 推測 .POL-IND
「これから何を食べて生きていくか，わかりません。」

7. 結論

本論では，韓国語の疑問文の形成について考察し，主に次のことを述べた。

①韓国語の疑問文は，中世語から現代語（標準語，慶南方言，済州方言）に至るまで一貫して「準体言＋疑問形式 *-ka/ko*」の構造となり，疑問形式の前の要素を体言化し，名詞句相当の構造を作ることによって形成される。
②韓国語の疑問文には，大きく K 型（中世語の名詞述語疑問文の *-ka/ko*，慶南方言・済州方言の *-ka/ko* など）と N 型（中世語の動詞述語疑問文の *-nya/nyo*，標準語・済州方言の *-nya/ni*，慶南方言の動詞述語疑問文の *-na/no* など）がある。
③ N 型の疑問文は疑問形式 *-ka/ko* の *k* が弱化したことにより形成されたものであり，*k* の弱化には名詞句用法標識 *-i* が重要な役割を果たしている。
④コピュラを有する直接疑問文は，現代語では二方向への展開がある。(i) 現代標準語はコピュラが動詞述語疑問文の方に統一した結果，K 型の疑問形式は現れず，N 型の *-nya/ni* が成立する。(ii) 慶南方言は従来（中世語）の名詞述語疑問文と同一に扱うことで，K 型のコピュラ疑問文が成立する。済州方言にも K 型コピュラ疑問文がある。中世語には K 型コピュラ疑問文の [NP-*i-ka*] の構造は見当たらない。直接疑問文においてコピュラは歴史的に後で現れたと考えることができる。
⑤丁寧体疑問文における疑問形式の濃音化は，尊称の名詞句用法標識 *-s*（元来は体言基盤の体言化辞）の影響によるものである。中世語は，この *-s* と疑問形式 *-ka/ko* を分離して表記することから当時はまだ濃音化が起らなかったと考えられる。
⑥疑問形式の濃音化は，現代語では未来を表す体言化辞 *-l* の後でも起こる。これは，動詞基盤の体言化辞 *-l* に体言基盤の体言化辞 *-s* が重複して用いられたことと関係する（注 33 参照）。

韓国語の疑問文の形成について包括的・統一的な説明を与えるには，「体言化」に関する首尾一貫した理論的基盤が必要である。本論では，Shibatani（2009, 2017,

2018, 2019）の体言化理論がそのような理論的基盤を提供してくれることを示した。

参照文献

（韓国語文献はハングル順，日本語文献はアイウエオ順，英語文献はアルファベット順。韓国語文献については，漢語がハングルで表記された箇所は漢字に直して表記する。）
高永根（2011）『第四版　中世國語의 時相과 叙法』（中世国語の時相と叙法）ソウル：集文堂.
高恩淑（2011）『國語疑問法語尾의 歴史的變遷』（国語疑問法語尾の歴史的変遷）ソウル：韓國文化社.
金武峰（1988）「中世國語의 動名詞研究」（中世国語の動名詞研究）『東岳語文論集』22: 1–32.
金完鎮（1980）『鄕歌解讀法研究』ソウル：ソウル大學校出版部.
南豊鉉（1996a）「高麗時代 釋讀口訣의 ‘尸/ㄹ’에 대한 考察」（高麗時代釋讀口訣の ‘尸/ㄹ’についての考察）『口訣研究』1: 11–44.
南豊鉉（1996b）「高麗時代 釋讀口訣의 動名詞語尾 ‘-ㄱ/ㄴ’에 대한 考察」（高麗時代 釋讀口訣の動名詞語尾 ‘-ㄱ/ㄴ’についての考察）『國語學』28: 1–48.
朴鎮浩（1988）「古代國語 文法」『國語의 時代別 變遷 研究 3：古代國語』121–205. ソウル：國立國語研究院.
徐正穆（1987）『國語 疑問文 研究—慶南方言과 中世語의 WH- 現象을 中心으로』（国語疑問文研究—慶南方言と中世語の WH- 現象を中心に）ソウル：塔出版社 .
安秉禧（1968）「中世國語 屬格語尾『-ㅅ』에 대하여」（中世国語 属格語尾『-ㅅ』について）『李崇寧博士頌壽記念論叢』337–345. ソウル：乙酉文化社.
安秉禧・李光鎬（1990）『中世國語文法論』ソウル：學研社.
李崇寧（1975）「中世國語의「것」의 研究」（中世国語の「것」の研究）.『震壇學報』39: 105–138. 震壇學會.
李丞宰（1995）「動名詞語尾의 歴史的 變化—『舊譯仁王經』과『華儼經』의 口訣을 中心으로」（動名詞語尾の歴史的変化—『舊譯仁王經』と『華儼經』の口訣を中心に）『國語史와 借字表記』215–252. ソウル：太學社.
李丞宰（1996）「‘ㄱ’弱化・脱落의 通時的考察—南權熙本『楞嚴經』의 口訣資料를 中心으로」（「‘ㄱ’弱化・脱落の通時的考察—南權熙本『楞嚴經』の口訣資料を中心に」）『國語學』28: 49–79.
李賢熙（1982）「國語의 疑問法에 대한 通時的研究」（國語の疑問法についての通時的研究）『國語研究』52. ソウル大學校.
張景俊・O Minsek（오민석）・Mwun Hyenswu（문현수）・He Inyeng（허인영）（2015）『瑜伽師地論 巻 20 釋讀口訣譯注』ソウル：亦樂.
張淑英（2008）『翻訳朴通事諺解（上）注釋』ソウル：韓國文化社.
鄭聖汝（2013）「濟州方言의 ‘-ㄴ다’와 關連 語末形式의 對立에 대하여」（済州方言の ‘-ㄴ다’と関連語末形式の対立について）『方言學』17: 105–141.
鄭承喆・金寶香（2013）「濟州方言의 說明疑問과 判定疑問—語尾의 中和現象을 中心으로—」（済州方言の說明疑問と判定疑問—語尾の中和現象を中心に—）『方言學』17: 79–103.
Co, Kyu-thay（조규태）（2010）『龍飛御天歌（改訂版）』ソウル：韓國文化社.
許雄（1975）『우리 옛말본—15 世紀 國語形態論—』ソウル：샘文化社.
洪起文（1956）『鄕歌解釈』朝鮮民主主義人民共和國科學院.
洪宗林（1975）「濟州島 方言의 疑問法에 관한 考察」（済州島方言の疑問法に関する考察）『論文集』8: 150–226. 韓國國語教育研究會.
黄善曄（1997）「中世國語의 ‘이’脱落 名詞에 대하여」（中世国語の ‘이’脱落名詞について）『울산語文論集』12: 203–213.
伊藤英人（2012）「古代・前期中世朝鮮語における名詞化」『東京外国語大学論集』85: 77–104.
河野六郎（1979）「中期朝鮮語の時稱體系に就いて」『河野六郎著作集 第 1 巻』508–534. 東京：平凡社.
志部昭平（1972）「中期朝鮮語の疑問法語尾に就て」『朝鮮学報』62(4): 1–61.
鄭聖汝（近刊 a）「体言化と名詞句用法標識の関係—歴史的発達の観点から見た日本語の「の」と韓国語 *kes* の比較を通して—」鄭聖汝・柴谷方良（編）『体言化理論と言語分析』大阪

大学出版会.
鄭聖汝（近刊 b）「韓国語の体言基盤体言化――いわゆる属格 *-s* の修飾用法と名詞句用法について――」鄭聖汝・柴谷方良（編）『体言化理論と言語分析』大阪大学出版会.
山田孝雄（1908）『日本文法論』東京：寶文館.
Lee, Ki-Moon and S. Robert Ramsey (2011) *A history of the Korean language*. Cambridge: Cambridge University Press.
Martin, S. E. (1992) *A reference grammar of Korean.* Tokyo: Charles E. Tuttle Company.
Ramstdt, G. J. (1939) *Korean grammar*, Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.（金敏洙・河東鎬・高永根（編）（1986）『歴代韓國文法大系』2，塔出版社に再録）.
Shibatani Masayoshi (2009) Elements of complex structures, where recursion isn' t: The case of relativization. Givón T. and Masayoshi Shibatani (eds.) *Syntactic complexity: Diachrony, acquisition, neuro-cognition, evolution*, 163–198. Amsterdam: John Benjamins.
Shibatani Masayoshi (2017) Nominalization. In: Shibatani, Masayoshi, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.) *Handbook of Japanese syntax*, 271–332. Berlin: Mouton de Gruyter.
Shibatani, Masayoshi (2018) Nominalization in crosslinguistic perspective. In: Pardeshi, Prashant and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese contrastive linguistics*, 345–410. Berlin: Mouton de Gruyter.
Shibatani, Masayoshi (2019) What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization, in Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani and David W. Fleck (eds.) *Nominalization in languages of the Americas*. 15–167. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
Shibatani Masayoshi and Sung-Yeo Chung (2018) Nominal-based nominalization. *Japanese/Korean Linguistics* 25: 63–88.
Shibatani, Masayoshi and Hiromi Shigeno (2013) Amami nominalizations. *International Journal of Okinawan Studies*. Vol 7, 107–139.

執筆者連絡先：
〒 560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5
大阪大学文学研究科
e-mail: chung@let.osaka-u.ac.jp

［受領日　2017 年 4 月 6 日
最終原稿受理日　2019 年 9 月 1 日］

Abstract

Interrogative Sentences and Nominalization in Korean: With Reference to Nominal and Verbal Predicate Interrogatives in the Gyeongnam and Jeju Dialects

Chung Sung-Yeo
Osaka University

Nominal predicate interrogatives in Korean originally had the structure of [nominal+*ka/ko*]. This paper argues for the analysis that verbal predicate interrogatives have also had a nominal structure before the question particles *-ka/ko* in Middle Korean and through Modern Korean. Elements playing the central role in this analysis are the nominalizers *-m*, *-n*, *-l* for verbal-based nominalizations and *-s* for nominal-based nominalizations, the latter of which is also used in polite interrogatives. In advancing our arguments, Shibatani's (2009, 2017, 2018, 2019) new theory of nominalization proves particularly useful, according to which not only interrogative forms of Middle Korean, but also those varieties found in Gyengnam and Jeju dialects can be explained in a comprehensive and principled manner.